

基督教徒の姦淫

米國羅馬教會裏面

僧侶の姦淫といへば、日本にては墮落坊主が宗門の戒律を破りて、妻妾を蓄へ男色を娯む位の事に過ぎざれども、米國基督教會の僧侶が姦淫罪に問はれて處刑せらるゝ判決書を見るに、其犯罪の性質の慘忍非道なること、日本にて例をとれば、都新聞の小説にありそふな針金強盜、ピストル強盜といふ兇漢のそれに匹敵すべきものにて、恚んな醜態を棚に上げて置きながら、好くも基督教徒の道徳など、大きな聲にて云はれしものかな、曾て渴仰の志士ゴルギが、米國の新聞紙より非常なる中傷を受けたる時、日本の一部には、流石に米國は社會制裁の嚴格なる處なり杯とモツタイらしく感心したる人も有る様なれば、先づ最近數年間に於

鐵 火 石 火

ける事實を計發して洋鬼道徳の鐵面皮を引きむいてやるべし。

▲教父チャールズ、フラハチーはマリー、スキニーといふ十四歳の孤兒を強姦して一八九五年九月、七年禁錮に處せられたり。

▲教父、アウロラのライデンは四人の小兒を姦淫して死に至らしめたる爲、シヨリエットの監獄に下さる

▲ニューヨーク、ブルークリンの僧ヨサスは近隣に聞えたる淫僧なるが結婚せんとする一人の男を毆打したる爲刑せられたり、此男は兼て僧侶の評判を知り居たるを以て、其花嫁を僧侶に托して祈禱の一室に入る、事を拒絶したる爲僧侶の感情を激せしめたるなり也

▲ニューヨーク、ロンゲアイランドの教父ステフェンは祈禱室にてヘンリー、パンズといふ人の妻を姦したるより裁判所にて千弗の罰金に處せられたり。

▲ソノミツシユの教父アーベは娯樂を用ひて處女を誘惑したる爲處刑さる。

▲アーマデルの僧正、ドクトル、マホニーは十六歳の令嬢を強姦して、其父なる人の爲に鞭撻されて死す。

▲メルホルンの大僧正ガウルドは一八八五年九月十七日、市の有名なる法律家オファアールルより左の數罪惡を摘發されたり、

一、或る四人の留守宅を見舞ふて精神的慰藉を與ふるものと稱し、其妻を強姦す。

二、ツエー、ホコニーなる者に其妻の姦淫料として毎年一定の金を支拂へり。

三、自家の下女アンネ、ヒーアレーなる者を捉へて強姦す。

基 督 教 徒 の 姦 淫

四、セント、フランスの聖堂を以て自己の情婦密會所となしたり。

▲アウストラリアのチスタードルの教父カーターは一八九一年五月八日、三年の禁錮に處せられたり、罪狀は自己の教會の女學生三十人を姦したる事發見されたるによる

▲一八九〇年六月廿六日或る僧侶は巴里の一寺院に於て警吏の爲めに捕へられたり。罪狀は七人の少女を姦したるによる。彼は民衆よりリンチされんとして辛くも危難を免れたり

▲教父ドミニック、オグラデーは罌粟花の如き少女マリー、ギルマーチンを虐殺したり、此女は彼が始めシンシナチに於て姦したるものにして、兇行の原因は無論痴情の果也。

▲モントリールの教父ジョセフ、カベルトは十五歳の少女ジョセフィン、ビューカムを強姦して無慘にも蒼の花を散らしたり。

▲教父、フヒリツプ、クルードはゾエ、アラード嬢を誘惑して相通じ共に逃走せり、彼は嬢の父ジョセフより訴へられたり。

▲バルチモアの教父ヨハン、ホーグは令嬢エー、リマンを姦す。

▲マーブルヘットの教父ヒーアラーは妙齡の處女が其意に隨はざるを怒りて之を凌辱す。

▲グリーンフィルドの教父マクカーチーは信者の妻と通じ、其夫を捨てしめんとして、銃殺さる。

▲サギナウの教父バンダーホーンはコルフオールドなる者の妻を姦して其夫より銃殺さる。

▲教父トーマス、ゲーゲンは家番の處女を強姦し、被害者は泣きて僧正スホールザンクに訴へ

出でたり。

▲カンカツキの教父クルエルは信徒エンゲラ嬢を欺きて散々に弄びたる上結婚すべしと詐りて彼女を田舎の旅館に連れ出し、置き去りにして姿を隠したり。

▲ニューヨーク、ブルクリンの教父、ビーター、ガネールはロバート、ホークス夫人を欺きて姦し、遂に之を通じて同市三十一街二百七十三番地の自宅にて夫人と同衾中、ホークスの爲部屋の鍵を握られて現場にて捕へられたり。ホークス夫人は此時數人の兒の母なりきといふ。

▲ニューヨーク、フワハローの教父トーマス、ウォールドロンは七歳の少女を強姦して五年の懲役に處せられたり。

▲ノースカロリナのウキンチエスターに於ける教父ジエー、ホイルは祝宴に列せんが爲セント、ルイに赴く途中美人を見て慾情を起し、突然強姦せんとして果さず。

▲トレードの教父コラシンスキーは十一歳の少女を捉へて強姦を遂行す。

諸君、記者はあまりに埒もなき事を長く書き續けたり、されど之事實

也。然り恐るべき事實なり。古來白人の偽善が如何に基督教の名によ

りて敢行せられたるかを想ひ其本源たる僧侶の亂行が此の如きものある

を見來れば如何。咄、教會よ、信仰個條よ、北米幾億の洋鬼がいかに汝

の名によりて正義を呼び、人道を稱へたる事よ。彼等が北歐の孤兒ゴル

キーの私行を摘發して狂するが如くなりし時、天日光昏く、凶兆天に在り、フアルコン飛んで白館樓上に怪鳴すれば、見よ無数の惡鬼、銅臭國の天に群り、火と土との災禍を呼びて飽くを知らざる米人の偽善を呪ひつゝありし事を。

米人の正義、人道は、幼女を強姦し、處女を凌辱し、妻女を誘惑して恬然として愧ぢざるに在るか、咄、恐るべき基督教徒の偽善よ。

讀者は右に列擧したる僧侶の姦淫罪が極めて不自然にして慘忍非道なるものあるを見て、之等の多くが僧侶の突嗟の獸慾により、或は聖堂の祈禱室に於て、或は教會の秘密室によりて遂行さるゝものなる事は苟もゾラ、モーバツサンの小説を讀みて、教會の事情に通じたる者の容易に首肯し得る所ならん。

日本の教會も昨今は殆ど男女密會場の觀あり、殊に某牧師の如きは

宛然高等媒介人の如く、教會の信徒を配偶して大に貴族の壇家を造らんとし、貴族の青年男女を教會に連れ來る者に對しては、一人に就き五圓の謝禮を爲す密約ありといふ。神の靈驗は十字架の聖像より來らずして、婦人席の廂髪より來る。

此處神秘にして到底科學が説明し得る範圍に非ずといふ。

此處まで墮落し來れる日本の教會が、亞米利加の教會と肩を並ぶに至るはモツ一步の處なり、飛乗り牧師、警察牧師、それ戮心努力せよ。

越後女と名古屋女

一 富士山の見ゆる國

『富士山の見ゆる國には美人なし』といふ俚諺は随分古きものなれども、余は此事の眞に詐りならぬを信するもの也。まよごとや富士見十三國、簀の子茶店に汐焼く煙たなびきて、並木の松が枝越しに富士の姿の見えつ隠れつする處に美人とては無きぞかし。

純粹の江戸の女は、氣まへがよしと人はいへど、余には何處が好いかチツトも分らず、それに江戸ツ子ガリの小説家などが、江戸女を持て囃す口の下から、上總女は尻が大きい、房州女は下女に出來て居るの、相摸女はツツくしいのと口穢く罵れど、余の眼より見る時は、江戸女も、上總女も、相摸女も、元同系、同類の女にして、チツトも違はず。

勿論記者は上總相摸の婦人を悪しと思はざるが故に、又江戸女も憎しとはせず、去りながら記者は、上總、相摸の婦人の下卑と淺薄とを喜ばざるが如く、江戸の婦人の陋劣と浮華とを喜ばず。

元來江戸女は、上總房州の女と同系、同屬也、自惚れて自ら高しとするは陋ならずや。

二 同類を嘲る江戸ツ子

『雉子啼や草の武藏の八平氏』イキとか、スイとか、イナセとかいふ事、記者は、大槻如電にあらざれば一向に知るよしはなければ、今住みわぶる里の門近く出で、蕪村の句を誦し、永き日杖を村に曳きて、榛と櫟の木蔭に遊ぶ子守女と語を交して見るに、かのむさし野の逃げ水の落ちて隅田の淵となり、流れて多摩の瀬となれど、原は秩父の山ついき同じ泉にかよめる如く、上總、房州、武藏、相摸ともとは人情、風俗ともに

一なりしものにて、『げすな』とか、『べらんめい』とか、『おめえ』とか、『あつち』とかいふ語の誰は、大そう粹なように聞ゆれど、これ全く上總房州の『べえ』『べい』と同系同類の語にて、それより醇化されたる事は明か也、換言すれば、江戸語といふものは田舎語の標本として江戸ッ子が輕蔑の意味に用ふる『べえ』『べい』の武藏語より轉訛して中央語とならんとする過渡時代にあるものにて、江戸語といふものは『オタマジャクシ』でもなし、『蛙』でもなし、尻尾の残つて居る蛙の如し、イキ、イナ、イナセ、イナセでも勝手にいふがよし、余は少しも感心出來ぬ也。

江戸女のいやみは、江戸語の如し、元來が上總、相摸と同系統なれば、願つて見た處で色の白い、恍惚するような美人の出來よう所謂はなし、仕方なしの負惜み、『色の淺黒い』とか、『澁い』とかいふ事は、あとから付けた理窟にて、それがまた永い間の趣味となれば、趣味が遺傳となり、

都市生活の結果は、屁のような事に虚榮を張りて、それを『意氣地』とか『達引』とかいふなれど、記者のやうな田舎者には、一向におもしろからず、泥の中でなく蛙が、木の葉の上で鳴いたとて、蛙は蛙也。

地理の上から考へて見ても常識にて分る事也、夏季房州に滞在したる人が、武藏一國距て、相摸の三浦半島に來て見よかし、房州と相摸と人情風俗の如何に似通へるかを、其間にある武藏のお江戸にそんなよき女の出よう譯はなし、いやみなものは江戸女也、江戸女の自惚也。

見よ、見よ、江戸女が同系、同類の兄弟を嘲りて自ら高しとしつゝある間に、東都の聲色は、驚くべき勢を以て『越後女』と『名古屋女』とに奪はれつゝ、在るにあらずや、玉肌、水膚、雪の如く白く、大理石の如く艶かなる『越後女』と妖麗濃色、瓜實顔の『名古屋女』とは、都の花の色香を奪ひて、幾多の輕薄兒を惱殺しつゝあるに非ずや。

三 雲のかよらぬ峰はない

『あまりつらさに出て月見れば、雲のかよらぬ峰はない』想へ、北國の秋たけて、黒姫、妙光、彌彦の峰よりくり出す雲脚早く、月の光を呑んで、明暗さだめなき時、峰巒軒に懸るかと思ゆる。山亭の欄干によりて、雪をあざむく北國の美人が、座ろにつとめの身をかこち、想ふて郷里の弟妹に及ぶの情景この一篇の俚謠に、のこす所なく現はれたるに非ずや、越後はまことに美人の多き國也、まことに賣女の名産地也。

越後は、冬長く、雪深し、老若室内に塾居して不善に陥り易く、山嶺の傾斜急にして道路險惡交通尤も不便なれば、商業發達せず、さりどて地味農耕に適せず、加ふるに波浪の險惡と、港灣の缺乏とは、細民をして他郷に出稼して勞働するの止むを得ざるに至らしめたり、『越後獅子』『越後の米搗』『越後の三助』の如きは、實に其結果に外ならずして、所謂

越後女も又此窮迫より來れる也。

越後は此の如く天然の地勢、風土の良好ならざる所なれば、自然、貧富の懸隔甚しく、地主は彌々土地を合併して富を積めども、細民は小作人となり、小作人は飄泊して出稼人となり、一般社會の生計は極めて困難也。されば、婦人も容貌醜く、身體強壯なるものは、籠を負ふて山を越え、馬に股りて野を行き男子と同じ勞働に服すれども、容貌の秀麗なるものは、新潟、寺泊、柏崎、直江津、高田、三條などに出で、旅客に色を嚮ぎ、媚を賣り、以て老父母を養はざる可からず、憐む可からずや。既に自然の原因あり、之に加ふるに越後は美人の多き所也、雪の如く白き顔面、大理石の如く艶かなる肌、西京風の装を凝らして、燃ゆるん花の唇に横笛の歌口をしめして、愁をこむる一節の、いかで、波浪あらき北海に漂はれたるとまり客の腸を断たざらん。

四 勞働を卑視する名古屋

勞働を卑しむ陋風は、日本の特色といふべく、都市に於て殊にその甚しきを見る。而かもその都市の中にも名古屋ほど此惡風の盛なる所はあらざるべし、名古屋の市民は、殆ど盡く黄金の亡者也、彼等は黄金の前には親子なく、同胞なし、而して彼等は出來得る限り筋肉の勞働を避け、遊惰、安逸の間に之を獲んとす、成る可く華奢なる衣服を纏ひ、成る可く筋肉の勞少くして、千金を一擲せん事は彼等が畢生の願望也、故に名古屋には、眞の商賈といふべきもの一人もある事なし、名古屋の商人は半ば幫間を兼ねざる可からず、半ば藝人を兼ねざる可からず、名古屋の商人は、好く茶を立て、花を活け、謠曲をうなり、書畫骨董を弄び、以て貴族富豪の後庭に出入し、阿諛、佞辯、以て不當の利を貪る。

想ふに東京市の勢力は漸次西下し、西京大坂兩市の勢力は、漸次東上

して、共に東海道の各驛に浸潤す、其兩勢力の衝突點は恰かも濱名の湖水也。濱名湖以東は、東京風俗の支配地にして、以西は京坂の勢力に支配さる、遠州濱松は東京勢力の終極點也、三州豊橋は京坂勢力の終極點也、名古屋は、無論京坂の勢力に支配さる。

大坂は、俗惡なる處也。西京はイヤミな處也、されど大坂も、西京も古きだけに、それ／＼よき氣質はあり、されど名古屋に至りては、京坂の長所、特點を盡く捨てさりて、その俗臭と、その惡點を以て建設されたる都市也

かくして名古屋は、賣淫の都也、賣淫は、名古屋人の理想也、何となれば、美しき衣きて、額に汗せず、手に力せずして黄金を得るは、賣淫外途なければ也、見よ、名古屋の女が如何に幼少より藝妓たらんとして苦心、焦慮しつゝあるかを、彼等はその貧しきと、富めることに論なく、

藝妓になる事を以て、男子が軍人になるやうに名譽に思ひなせる也。

見よ、瓜實顔に色白く、鼻條長くして、口許にしまりなき名古屋美人は、潮の如く東都にせまり来る也。名古屋人は、親子互に膝を交へて情事を語り、親子互に姦淫を勧む、姉妹相和して一男子と通じ、姉妹競ふて一男子に媚ぶ、記者は、曾て名古屋の或る男がその妹の裸體寫眞を持ち來りて之を親しき友に與へたりしを聞けり、或人名古屋を嘲りて曰く『名古屋市嫉妬と強姦なし』と。

五 驕慢と憂愁

名古屋女と越後女とはかくして南と北とより東京市に迫り、上總女相模女と同系なる江戸女を色情界より驅逐し、自ら肉の女王となり了したる也。

名古屋女の賣女となるは、自ら好んで也、越後女の賣女となるは、家貧

しきが故也。前者を見よ、其長き鼻條と何處となく、ハビのある頬のあたり、縮りなき口もとに得意の色あり、自慢の色あり、更に驕慢の色あり。後者を見よ、その滴るが如き黒瞳何となくさみしき口許、何となくへ沈鬱なる鼻の格好に悲哀の色あり、憂悲の色あり、更に羞耻の色あり。賣淫は、家族制度の産物也、一般男子の智識の程度が進みて、女性に對する偏見、固執の跡を絶たざる限り、東京は、依然賣淫の都たるべし、一般女子が覺醒して自らその地位を高めざる間、可憐なる越後女、名古屋女は、依然として肉の女王たるべし。

上總女と房州女

一 東京市の下婢奉公

東京市中に奉公する下婢の大多数は上總もしくは房州の産也、されば東京にては上總女房州女と云へば既に下女を意味する事の様に思惟せらる、眞に東京市中に奉公する上總女の中には、相應に資産ある家の子女も少からず、必ずしも生活に追はれ、糊口に窮して奉公に出で來れるに非ず、奉公といふ事上總地方にては既に一種の習慣となり、頑として抜く事能はざる地方的俗習となりたりたる也。

されば此地方にて、娘年頃となりて學校に通ふが如きは、人も晒ひ、身も差づる事にて親にせまりて退學を急ぎ、我も我もと競ひて奉公に來る也、甚しきに至りては、奉公を結婚よりも重視し、お嫁に行きて出戻り來る事は左程と思はざれども、奉公に行きて首尾よく勤め了り、花の都

の新装を凝らして歸省する事もあれば、之村中の一大事件にして、太郎作の悴が金鵄勳章を貰ひたるよりも高き評判となる、ましてや家計豊かならぬ家の子に至りては、奉公は人間の何より大切な勤務にて、かの簀入の日など東京に行きたる娘が、流行の廂髪など装ひて歸り來れば、親は實に玉の輿に乗りたる程の出世とも思ふ也。

かくて上總房州といへば何とはなしに無智盲昧の郷を指すが如く連想せしむるに至れるも是非なき事ならずや。

二 長い橋、細長い井戸

上總地方の俚諺に『長い橋を渡つて、横に細い井戸の水を飲んで來なけりやあ人間に成れない』といふ事を云へり、之は蓋し『淺草の厩橋を渡りて、東京に出で、水道の水を飲んで奉公して來なければ、人間らしいものには成れない』といふ意味なるべし。

眞に上總地方にては、奉公に行き、江戸を知りて初めて人となれるも

のと思ひ做したるは事實なるべし。まだうら若き處女の花やかなる都の榮華を夢み、友達の誰彼の身の上話を聞き知りては、何とて羨ましさに堪え得べき、上野の動物園は嘸かし面白き事なるべし、淺草觀音の賑ひは如何なるらん、提灯行列、花電車、畫にのみ見たる都の空のなつかしさよ。好き奉公口のありたりといふ報知は、棚から落ちた牡丹餅とも何とも云ひようのなき思ひにて、仕度もいそぐ、手織木綿の新しき袷に、大きな風呂敷包をかへて、水静かにながれ行く大川端に沿ひ、岸の柳の影を小走りに、まだ見なれぬ人の風俗、四邊の光景も物珍らしく、突き當る氣早の兄さんに幾度となく驚かさながらも、身の來し方、行く末の事など、案じ煩ひつゝ、おぼつかなくもたどり行く田舎娘の行末、果して如何なるべきか。

夢のようなる果敢なき希望、恐ろしき現し世の状態、底ひしられぬ墮落の淵、思ひやるだに哀れ深きは盲目の處女が身の上也。

三 馬琴の八犬傳、日蓮の生地

芝居のチヨボにて、『東や上總の果てまでも』と云ふを聞けり、昔の人上總を東の果てと思ひ做したる、必ずしも無理に非ず、真に日本は犬吠崎を中心として折釘のやうに、北に伸びたり、總房は恰かも半島の形をなして突出したれば、交通も不便にて、殆ど別天地の姿をなしたり。

『燈臺下くらし』の比喩に漏れず、文化の中心たる東京市の四圍は、かの江湖千里の地に比し反て、文明の風に浸みず、總房二州の如き東京灣の水を距つるのみなれども其開化の度の低き事意表外にて、昔は足一度其内地に入れば殆ど半開の蠻地を侵すの思ありしならん。

今日にては本所より海岸線といふもの出來たれば左程の困難もなければ、昔にありては、東京灣の波浪、船の往來を絶つ事あれば、陸路非常の迂廻をなさざる可からず、不便此上なき地なりし也。今日にても、上

總君津郡のあたりは東京灣の汽船、風浪の爲に交通を絶たるゝ時は、一
葦帯水の間に在りながら、殆ど一日程の時間を費さざる可からず。かゝ
る地勢なりしかば小説家、瀧澤馬琴は早くも之をか、山東の梁山泊に見
立て、里見八犬傳を此地に配して、日本の水滸傳を作れり、馬琴の見た
る如く總房二州はまことに世俗の波の遠く及ばざりし地なり。

さればにや此地方曾て偉人を生みたる事なし、されど房州は日蓮上人
の生地也、日蓮は日本に前後並ぶものなき傑物なれば、房州が之を生み
たる以上大に誇る可きに似たれども房州の地に通せる人曰く、『眞に房州
に日蓮を生みたる事によりて其精華を盡く此一人に吸収されたるなる可
し、予の見る所にては未來とも恐らく何人も此地より出でざる可し』と、
兎に角總房二州の人が、獨立の氣に乏しく徒爲徒食の風のみ盛なるは争
ふ可からざる事實なるに似たり。

四 海蜻蛉と網旦那

昔、下總逆井の關にて渡船者を調査したる時、驛吏は總房沿岸の漁夫
を呼んで『海蜻蛉何人』と稱せり、彼等は此の如くにして海蜻蛉と『百姓』
とを區別し、漁夫を以て農民以外の階級に取扱ひたり。

されど之之武士より觀たる偏見のみにあらずして普通人より見るも九十
九里濱の漁民の生活状態は海蜻蛉の如く見ゆる也、彼等の煙波漂渺たる
漁村の丸木小屋に横臥し一紙半錢の貯蓄もなく、會々大漁の收入ありた
る時は、直に痛飲夜を撤し、月の光に、淡畫の雪の如き白砂の上に座し
て博奕を事とす、彼等は常に赤貧洗ふが如し、之元より『板子一枚の下
は地獄』てふ自暴自棄より來る放逸の生活が其原因をなすものなりと雖
も、更に重なる原因は彼等が生産機關を有せざる事也、則ち九十九里濱
は蒸汽機關の應用されざる以前より既に近世の産業組織行はれ、資本家

と労働者との階級は儼然として分立したりし也、

資本家とは何ぞや網旦那之也、海蜻蛉の群れたるが如き漁村を點じて網旦那と稱する少數の富裕者あり、彼等は多數の漁夫が命の玉の緒と頼む漁網を私有し、漁民をして之を使用せしめ、之によりて得たる利益の大部分を懐にし、纒かに生活に堪え得る限りの分配をなす、漁魚の事業が多數共力の結果に待つの外なきと、漁具の規模大にして漁夫各個が之を私有し能はざるとよりして、計らずも九十九里濱には、昔より一種の資本家制度行はれたりし也、之漁夫の生活が如何にも悲惨なりし所以にして、其原因を以て單に漁民の自暴自棄に歸し、博奕に歸するが如きは苛酷の説といふべし。

かくの如くにして海蜻蛉は白砂に横臥し、怒濤を潜りて其日くを送るのみ、一度不漁の事あらんか、綠海、白瀉、片貝、蓮沼の地一帯、炊煙

揚らず、其子女は我も我もと相携へて下女奉公に集まり來る也。

彼等か東京の下婢奉公に於て陥るべき運命を語るに先ち、余をして先づ、上總女の特質を説かしめよ。

五 上總女の特質

上總女は前にも述べたる如く快活にして多辯、淺薄にして輕卒、虚榮心強く、人真似が好き也、さればかの北越地方より來る出稼人が、或は湯屋の三助となり、或は米屋の搦手となり、外見もなく、色氣もなく、禪一つにて刻苦精勵、勤儉貯蓄、竟に江戸つ子に勝ちて一家を成すに比し、總房の女は東京に住む事二三年にして、直に都門の奢侈に感染し虚榮、虚飾を追ふて走る、其山の手に在るものは、途上往々瞥見するが如き、廂髪、リボン、滑稽ながらも女學生の風俗を摸倣し、其下町に在るものは多く粹者の風に倣ひ、怪しげなる抜衣紋して、俳優の評判をな

す、此點は江戸ツ子と相似て、流石に關東系の争はれぬ事を知り得る也。
上總女は絹張りの洋傘がさして見たきに働く也。上總女は廂髪に薇蓄
の釵がさして見たきに給金を貯ふる也。上總女はかくして心をこめし扮
装に、簾入の目を待ちかねて、礮の香高きふる里の砂道を踏み行く也。
月見草の咲き亂れたる礮の小徑を、枝豆の畑に沿ふて歸り行くオリブ
色の洋傘を見たる時、日に焦げ、砂にまみれたる海人の處女のいかで、
そを羨まざる事あらんや、かくして彼等は榮華の夢を夢み、天にも上る
心地して東京に上り来る也。

六 山の手と下町

山の手ヤマテの官吏くわんり、軍人ぐんじん、紳士、社員しゃいんの家に奉公するは萬事物がたくし
て、誘惑ゆうかく少く、禮義れいぎも覺おぼえ、讀よみ書かき、裁縫さいほうも覺おぼゆる暇あまあるべしとは普
通人この子こを親おやの思おもふ所ところにて一應無理いちおうむりならぬ事ことなれども、之實これじつは大だいなる想

像やまの誤あやまりにして實際じつげん若わかき處女ぢよの奉公ほうこうに山の手やまて程ほど危あや険けん多おほき處ところはなき也、下町
の誘惑ゆうかくは多く間接かんせつに来きたるものしにて當人とうじんの氣きさへ確たし乎やれば、妄あやりに恐
ろしき墮落だらくの淵ふちに沈しづむようの事ことはなけれども、山の手やまての誘惑ゆうかくは會々たたく赤裸せきだ
々らなるもの多く、殊ことに姿見あそみよき處女ぢよ杯はは決けつして心こころを許ゆるすべくもあらず。
如何いかに心固こころきものにて此魔手まてを免まぬる、事ことは極めて困難こんなんなるべし。

抑おさも山の手やまてに住すむ、學生がくせい、官吏くわんり、軍人ぐんじん、紳士、社員しゃいんの多くは不自然ふしぜんな
る世紀末せいきまつの生活せいかつに其身心しんしんを害がいはれ、情慾じやうよくの發作はつさく殆たいていど病的びやうてきなるもの多し、
筋肉きんにくの勞働らうどうは、機械きがい的てきの事務じむとなり、執意しついつ的てきの勞働らうどうは、強迫きやうぱく的てきの作業さぎょうと
なり、機關きくわんが人ひとを束縛そくはくし、自然しぜん力が人ひとを壓制あつせいする現代げんたいの生活せいかつに於て、人間
の性慾せいよくは殆たいていど病的びやうてきに衝動しょうどうして毫ちひも抑制いさげの餘地あまなし、彼等かれらは宛あやかも饑うえた
る狼おおかみの如ごとく其野生やせいの満足まんじつを希ねがふ也、下女げじよといはず、醜婦しゆうふといはず、彼等
の前まへには殆たいていど撰せんむ所ところなき也。茲こゝに於てか上總女かづさんなも亦また彼等かれらの寵ちやうに漏もれざる

也。

之に加へて永く山の手生活を送る間には自然女學生の風俗言語より一切の氣質も呑み込み、自ら之を模倣し、振假名をたよりに辛うじて讀み下したる新聞紙が教科書となりて幾分の世事にも通じ、西洋料理の名も一品位は聞き覺えるといふ事となれば、今更、田舎に歸りて奎兵衛、田五作の嫁となるも嫌なり、さりとて山の手仕立ての廂髪の手前、熊公、八公のお相手も出來ず、くよくと日を送る内いつしか芳春空しく過ぎて、あたら結婚の期は煙の如く消え去る也。

此種の女、多くは立派な口を開きて人前に出せば一角の女學生のようにも見ゆれど、皆耳學問、口學問に過ぎずして、完全なる事は針仕事一つ出來ず、徒らに空想にのみ驅られて、果ては好からぬ邪道に踏み入る也、危険なるは此種の女の虚榮心なるかな。

七 幽靈の正體見たり枯尾花

此種の運命に陥りたる女が、主家を飛び出し思ふようにならぬより、怪しげなる産婆學校に入るか、若しくは看護婦見習となりて暮すうち、誘惑また誘惑、果ては淺猿しき、賤業に墮落し、廂髪に海老茶の袴、時代の装を凝らして、獨身生活者多き本郷神田あたりの夕暗に佇む也。幽靈の正體見たり枯尾花といふ事あれど、吾人は之によりて所謂『墮落女學生』なるものの真相を窮ひ得たりと云ふべし。女學生、支那留學生に淫を擧げりなごは曾て新聞紙の口を揃へて報じたる處にして一時は教育界の大問題となり、果ては文部大臣の學生戒飭令とまでなりたれど、余は始より、學籍ある女學生に左程の醜事ありと認むる専能はざりき。されど『火のなき處に煙は揚らず』此種の女を見て直に女學生と見擬ふは強ち新聞記者の僻目とのみは云ふ可からず、さもあらばあれ、女學生諸

君の之が爲に社會より受けたる冤罪は氣の毒の至りと云ふべし。

勞働問題の聲一度社會の一隅に轟きそめてより、資本家と勞働者との關係に早晚何等かの革新を要すべき事は、殆ど萬人の認る所となれり。されど此奉公人と僱主との關係は杜漏に流れ、舊習慣に任せて放擲せられたるはなし、其解決は勞働問題と並びて現下の一大急務と云ふ可き也。

「黒」といへば記者は黒い學校服の飾り氣の無いのに青色の靴下を高く、髪をマガレットに束れて、氷すべりに餘念のない、急進的な、無邪氣な、快活な露西亞の女學生を偲ぶ、更に河畔の古城を望む葡萄畑の夕ぐれに、輕快な黒色のカシミア服に、玉蟲色のリボンをつけた農民の處女が籠に紫の葡萄を摘んで誰やら語りながら家路に歸る其光景を偲ぶのである。噫記者も亦此黒色を好む寂しい農民の子である。(成女學校評論より)

自然主義と虚無的思想

一 自然主義に對應すべき一般思想界の大勢

凡そ思想界の問題は、其哲學たると科學たると文學たると宗教たるとを問はず、決して個々別々に孤立して現はれて來るもので無い。今茲に文學上に顯著なる一代の大傾向があるならば、科學の上にも、哲學の上にも宗教の上にも必ず、其傾向に對應すべき一般の大勢があるに相違ない、則ち人間の活動といふ事が根底で、其生活の形式が變化するに連れて思想界の各方面に其影響が現はれて來る。

自然主義は恐らく十九世紀末から廿世紀にかけての文藝上の主要なる傾向であらう。自分は茲に自然主義が如何なるものであるかを説く前に、文藝上の自然主義に對應す可き一般思想界の大勢を述べて見たいと

思ふ。自分に徒らに一片の街氣に驅られて要もない傍徑に彷徨する譯ではない、此方面から説くのが自分の順序と思ふからである。

哲學はさうであるか、十九世紀初期に於ける人類の情熱的生活は、經驗と事實とを無視して空想一片の思索に耽らしめた、所謂夢的哲學若しくは思辯哲學は此の如くにして全盛を極めた。既にして革命の動亂も静まつて歐洲社會が秩序を回復して來ると共に科學が發達して來て、人類の生活は著しく實際的になつて來た。茲に於てか空想が輕蔑せられて、何でも科學でなければならぬ事となつた、此科學の結果を哲學に應用した結果、實證哲學、唯物論が一時歐洲の覇權を占るやうになつて來た。けれども十九世紀末葉から又此唯物論に反抗する傾向が現はれて來た、則ち科學萬能主義に對する一種の反抗とも見る事が出来る。それでは此科學萬能主義に對して起つて來た一種の反動は科學を敵視し、科學を

無視して再び舊時の空想一片の思索に歸たのかといふにさうでない、一度科學の眞味を味つて來た十九世紀末の人類は、いかに反動といふても科學を破壊し科學を敵視する事はなかつた。則ち彼等は情意の生活を智識の束縛から解放したけれども彼等は科學を捨てないで、其基礎の上に哲學を建てた則ちヴントやロツツエやパウルゼンのやうな現代の人は皆立派な科學の基礎の上に自己の哲學を建て、居る。換言すれば科學を基礎として汎神論、汎心論をなして居る。

次に政治の思想に見ても十九世紀初期の情熱時代に於てはルソーの思想であるとか、モリスの思想であるとかいふ様な極めて空想的なものが多い、從て運動にもブランキ、ブロンテール、バクーニン等のやうな急進的人物が多かつた。次でサンシモン、フーリエー、ルイブラン、ブルドン、ロバートオーエンの様な聊か組織的な思想家が現はれたけれ

ごも、何れも思辯哲學の感化を受けた人ばかりで、まだ科學的の根據は淺いものであつた。然るに自然科學が充分に發達するに従つて、カルル、マルクス、フリードリッヒ、エンゲルスのやうな立派な學者が現はれて唯物論的に社會を解釋し、立派な經濟學を樹立して、民主々義に科學的の步調を與へた。處が餘に科學的に唯物論的に人生社會を解釋せんとした結果、社會、國家、團體乃至は制度、組織といふやうなものを過重視して個人性を其犠牲とするといふやうな弊が起つて來た。茲に於てか近年に至つて、一種の反動が思想界に起つて來た。各個人の限りなき發展は決して人間の社會生活と抵觸するものでない、無制度、無組織、直に無社會といふ事を意味しない、人は制度なしの社會生活、組織なしの社會生活をなし得る者であるといふ思想が非常に勃興して來たけれども、此反動も前の哲學の場合に於けるが如く決して科學を無視しない、決して十

九世紀初期の思想に立歸らうといふのではない、矢張、科學の上に此思想を建設しやうといふのである、此代表者とも見るべきものは、自由思想家として地質學者として有名なビーター、クロポトキン伊太利の社會學者エンリコ、マラテスタの如き人である。

宗教に就て見ても同じく之に對應すべき形式がある、羅馬以來、中世紀を通じて宗教上の紛擾といへば之を要するに哲學と信仰との關係に就ていあつた。換言すれば希臘哲學と基督教との衝突であつた。然るにルツテルは自ら信仰といふものゝ眞の模型を示して、情意と知識との關係を事實の上に現示した、ルツテルは此點に於て宗教改革の始である、然るにカントに至つて此知識と信仰との問題は彌よ明かに解決せられた、カントは知識と信仰とを分離して、各獨立の地歩を與へた、此點に於てカントは宗教改革の終ともいふべき人である。此の如くカントが早くも宗

教に獨立の地歩を與へた爲にさしも甚しかつた唯物論、無神論の矢も實際に於て宗教の生命に危害を與へる事が出来なかつた。けれども、信仰といふものが凡ての知識と没交渉のものとしてから、自然個人の情意といふ事が重んぜられて、教會とか、信仰箇條といふやうなものが權威を失つた。則ち宗教は各個人の情意の世界に獨立すべきものとなつた。此個人的となつた處に、哲學上の汎神論と相應じ、思想界に於ける個人主義に相應する顯著なる傾向がある。

文藝が寫實主義から轉じて自然主義に來たのは、將に此一大傾向に相應する者であつて、其個人的なる點に於て、其沒組織的、沒形式的なる點に於て、更に其科學の弊害に反動して、而も科學の精神を無視せざる點に於て、互に密接なる關係を有するものといふ可きである。

二 科學的精神と科學との關係

知識と感情とは交渉のないものであるといふ事は誰も云ふ所である、然しながら交渉のないといふ事は相容れないといふ事とは自ら意味が違ふ。昔から随分宗教上の信仰に刺撃せられて偉大なる科學上の發見をした人もある。

又近頃有名なトルストイは科學を人生と没交渉なものとして絶對的に排斥して居る、けれどもトルストイの『平和と戦争』の如き『アンナカレニナ』の如き非常なる科學的觀察力がなくして出来るものでない。翁は科學を排斥する人であるけれども、科學的考察力、若しくは、科學の精神に於ては偉大なる力を有する人である。此の如く科學其ものと、科學的精神とは自ら區別をしなければならぬ。

自然主義は文藝が寫實主義に於て科學の弊害に陥つたのに反抗して起つた者である。けれども決して昔の情緒主義夢幻主義に立ち戻つた譯で

はない。科學其ものを以て文藝を律する事や、科學の研究法を以て文藝を縛する事をやめたけれども決して科學的考察力を捨てる事は出来ないのだ。以下少しく文藝が如何にして科學に捉へられたかをいふて見やう。

前項にもいふた如く、十九世紀に於ける人間の生活を三期に分類する事が出来ると思ふ、十九世紀の初期は革命の動亂中で各人が情熱に耽つた時代である、沈思冥想の暇がない、時代の感情は、非常に高調に達して、恰も瀑布の下るが如くに、泉の湧くが如くに、濔々として詩歌をなした。十九世紀の中葉は、社會の新秩序の定まつた時代であつて、各人は動亂の後を受けて反動的に非常な沈思冥想に耽つた。斯の如くにして散文の時代は來た、科學の時代は來た、反省、觀察、解剖、實驗此の如くにして、科學的研究法は、一代の流行に伴ふて漸く文藝の天地に侵入して來た。

單に科學萬能の風潮に伴つて、文學が其影響を受けたといふばかりではないけれども、此時代の人間の生活が、爾かあるべく根本的に要求して居たのだ、先づ文藝の受けた影響は多く科學の研究方法であつた、觀察、解剖、實驗、之を要するに、忠實に自然と人生とを模寫すれば好い、客觀を客觀として描出すれば好いといふ事になつて來た。之が則ち實寫主義である。

實寫主義は更に一步を進めて來た、或る作者は犯罪學、心理學といふやうな科學の研究の結果を小説の中心としやうといふ事になつて來た、例へば茲に一人の女優がある、恐ろしいコケテシユな妖婦で、實に幾多の男子を惱殺しては自ら快しとして居る。彼女の研究は彼女の生立ちからしなければならぬ、彼女の父母は非常に放埒な、不品行な大酒家であつた、親のアルコール中毒は如何に彼女に遺傳したか、彼女の幼少から

の境遇はさうであつたかといふたやうに、科學の方法に則るばかりでなく、科學の研究の結果を以て文藝を律せんとするの傾向が生じて來た。茲に至つて實寫主義も極處に達したものだといふ可きである。

けれども時代は既に熟して居た。文藝は今や科學に囚はれんとするの危機にありてふ警鐘は至る所に鳴り出した、文藝の獨立を重んぜよ、文藝を知識の王國より解放せよ、人類は速に科學萬能の宿醉より醒めざる可からずといふ事になつて來た。さしも甚しい勢を以て、情緒主義、夢幻主義に反抗して起つた實寫主義も、十九世紀末に至つて再び情意の王國に立ち歸らんとするに至つた。

此情意の王國に立ち歸るに當つて如何なる形式を以てしたかは、やがて自然主義とは如何なるものなるかといふ問題の解決になつて來る。知識に反抗してごこまでも感情で押して、かの十九世紀初期の情緒主

義に復歸するのさといふと爾うではない、只彼等は客觀物を只の現象として忠實に描寫したといふばかりでは物足りない、美術の上に於ても作家の生命のない模寫は進歩したる寫眞術が好個のアイロニーとなつた。文學の上に於ても作家の生命のない實寫小説は、黄色新聞の三面記事が好個のアイロニーとなつた。科學者が自然を觀察するやうに只客觀を客觀として細叙すればそれで能事足ると思惟した實寫主義は茲に一展開をしたのである。けれども一度十九世紀中葉の冷靜な知識の海を航海して、深い自意識の霧の中を過ぎて來た人類は、曾て極端なる情緒主義から、極端なる實寫主義に反動したやうな事は出來ない、彼等は科學を文藝の天地から排斥した、けれども科學の精神までも捨てる事は出來ない、故に自然主義には、矢張り實寫主義に於て見たやうな精細な、銳利な觀察がある、實寫といふ要素は自然主義にも依然として存して居る、けれど

も自然主義は只科學の精神を以て自然と人生とを見るばかりで、科學の研究方法に律せられたり、科學其ものに制せられたりしない。更に換言すれば、ワントやフエヒネルの哲學のやうに自然主義の作者は實寫主義を足場として、汎神論もしくは汎心的に自然と人生とを見るのである。自己の生命を客觀に附與して自他渾融の裡に之を描寫する。之を要するに自分の見る所を以てすれば、實寫主義と自然主義との間には進歩の緩漫な階段があるばかりで、實寫主義といふうちにも、之を好き意味に解釋して居た人は今の自然主義といふ概念の内容を其まゝに與へて居た人が決して少くない、否少とも自分は實寫主義を最も好き意味に解釋して今の自然主義と同じやうに考へて居た。由來一つの概念に新しい名辭を與へんとする場合には、之と對照する可きものを極端なる意味にまで引き落すといふ弊がある。實寫主義といふ名の爲に此點は大

に宛を雪いでやりたい。

三 個人意識とデカダン

科學の進歩と、普通教育の發達に伴ふて十九世紀は一般に知識が普及して來た、之が爲に人類の知識的水準は大に高まつて來た、個人意識は實に此教育普及の結果である。即ち各人とも自分の個性が絶對的の者であつて、何ものと雖、自己と同じ個性を有するものでない、けれどもそれと同時に其情緒生活に於ては英雄たる、凡夫たる、豪傑たる、愚民たると、美人たると醜婦たると、聖人たると盜賊たるとを問はず、一切共通のものであるといふ自覺、約言すれば個性に於て絶對的であると共に、人道に於て共通的であるといふ自覺に到達した。

之は實に十九世紀に於ける人間の生活の一大發展であつた。文明の進歩であつた。

曾ては國家とか、教會とか、君主とか、制度とか、習慣とか、乃至は組織とかいふもの、前に何等の苦痛もなく自我を忘れて服従して居た人類は、今や自己批評の時期に入つた、切實に自己を批評する、内省する自己を批評し、内省し、解剖した結果は之をヒューマニチーに問ふ、ヒューマニチーに参照する處に、忌憚なき自白がある、懺悔がある。

十九世紀末の人類はもう五彩燦爛たる英雄と、嬋娟窈窕たる姫君がすれつもつれて蝶の如く舞ひ狂ふ、夢のやうに花やかな物語を恍惚として聞いて居る事が出来なくなつて來た、彼等は自然を見るにしても、雷鳴、怒濤、暴風、急湍、絶壁といふやうな代表的な模型的な自然美よりも、路傍の草花、なだらかな岡、平坦な森に深く自然の美を索めやうとする、否彼等は之に憧憬するばかりではない、此平凡な自然や人間を通じて、曾て英雄や美人によつて表されたと同じやうな默示を觀やうとする。

る。彼等は自分の周圍に於て常に相見ると平凡な人の子の母に深い感興を覺えるばかりではない、聖母マリアを描いてマリアの瞳から人間を超絶した神祕の光りをとり去つて、夫に代ふるに、人の子の母の慈愛の光を以てせんとするので。彼等は蘆荻の影に泣く獵人の生活に深い感興を覺えるばかりではない、アウステリツの岡の上に立つて三軍を叱咤する絶代の英雄に、一兵卒、一馬丁と同じやうな恐怖、悲哀の情を興へんとするので、路傍に咲いて牧童に踏まれる姫むらさきにも薔薇の花と同じやうな自然美がある。近世の人は之を見やうとする。

此の如くにして瞑想の時代は來た、沈思の時代は來た、彼等の捉へて來る所は、忌憚なき自己の解剖、懺悔でなければ親しい友人や知己の事ばかりだ。彼等は好んで自己の周圍に眞實を描かんとする創作的情熱は、自然に彼等を驅つて其日常生活に近い人物をモデルにとらしめるのだ。

決して淺薄な好奇心から舊主人や、知己の私事を訾發しやうといふのではない。

人類が世紀末の苦しい生活に疲勞して、心身ともに一種の恐るべき病的状態に陥つたといふやうな説が一時才氣走つた科學者の口から唱へられて、澆季々々の呼聲が大分やかましかつた事もある、けれども自分を以て之を見ると、人間の情意の生活を無視して、醫學とか、經濟學とかいふもので人生の全てを解釋しやうとする者こそ恐る可き科學の亡者であつて、澆季の嘆は反つて彼等の上にあると思はれる。見よ、經濟的窮迫に對する革命の絶叫は、獨逸、佛蘭西、米國、露西亞を初めとして、近頃は最も保守的な英國にまでも恐ろしい反響を與へて來たではないか。デカダンの嘆は、果然來る可き革命的暴風前の靜謐に外ならぬ現象であつた、世は決して澆季でない、夜は黎明に先ちて一段の暗黒を加へるものである。

のである。

現代の作家が好んで道德的の不具者を選擧して描寫するのでは無い、例へば色情狂のやうな人物、餘りに自己中心に傾いた人物、意志が弱くて感情ばかり強い人物、行爲の力の皆無といふ可き人物、之等の人物は決して現代に限られた譯ではない、何時の世、如何なる處にもあつたのである。否、どんな英雄、豪傑と云はれた人物にも此種の缺點の何かを具有して居た事は明かである。

八犬傳の信乃といふ人物が、可憐なる少女に戀慕されて、其寢所に忍びよられた時に、端然として床の上に座つて、衣紋かきつくるひながら、何用があつて來たのかと極めつける所がある。何しに來たか分らない事はあるまい、如何なるクリチカル、モメントに於ても信乃は常に衣紋正しき信乃で、四書五經が鼻の先にぶら付いて居る。近代の人は人生

を此の如くに見て満足して行く事は出来なくなつた。

自己意識の強い廿世紀の人は此の如き描寫に満足する事が出来なくなつた、デカダンの嘆、澆季の嘆、あまりに淺薄な聲ではあるまいか。

四 青年の虚無的傾向

自分は更に歩を進めて自然派の技巧に就て批評する積りであつたけれども、限りある誌上の事であるから茲には遠慮して結論に急ぐとしよう。自然主義は青年の聲である、現代の青年の實際生活から來た絶叫である、曾てはニイチエ主義が喧傳された、曾てはトルストイズムが一部の青年を動かした。けれども自然主義の場合に於けるが如く、青年全體が一齊に起ち、云はず語らずの間に大同團結を形成して、技巧派の老朽連に喰つてかゝるといふ壯觀を呈した事はなかつた。見よ、目下に於ける自然主義に關する論争は、恰も青年と老朽者との戦争を見るやうな状態ではないか。

態ではないか。

露西亞のニコラス一世は、非常な嚴峻苛察の暴君であつて西歐の新思想を蛇蝎の如く忌むで、恐ろしい壓制政治を斷行した、故にニコラス一世の治下に於ける二三の新思想家は殆ど皆大陸に流離してバイオニアとして悲惨な生涯を送つた。アレキサンダー二世の治世になるとニコラス一世の壓制政治の爲に抑止されて居た新思想が潮の如く押し寄せて來た。ニコラス一世の治下に於て二三のバイオニアにのみ了解されて居た新思想は茲に至つて一般社會を通じて、青年一般の生命となつて來た、天下は年長者と青年の二手に別れて、新舊思想の激しい衝突が起つて來た。

ツルゲテフの書いたバザロフは此時代に於ける青年の模型であつて、彼は古い社會の習慣、制度から見て慥かに虚無黨であつた、但し虚無黨

といふても之は暗殺と爆烈彈とを連想せしむる政治上の意味を含むでないのではない、個人意識の強い、合理と認めたる事は、如何なる習慣も制度も之を排して進むといふ調子は文壇に於ける自然主義の青年と、技巧派の老年者との間の争論に甚だ相似て居る。

自然主義の青年は文壇に於ける一種の虚無黨である。彼等は文藝の天地に於ける何等の權威をも認めない、創作的情熱に對して結構、條理を無視する點に於て、虚無黨の青年が個人の情意を制する社會の習慣、制度を無視したのに相似て居る。而して技巧派の老人連が自然主義の青年に對する態度が如何にもバザロフの父ピーターに似て居るから面白い。今の青年は墮落したとか、デカダンに陥つて居るとか、吾人は此聲を聞く毎に人間の老ひやすきを想ふて一種の悲哀にうたれる。

十九世紀に於ける改革の祖と稱せらるる、ルーソーの思想に二つの矛盾

したる思想があつた、無論ルーソーは天才であるから、此矛盾を言外に解釋して居たに相違ない、けれども彼の著作の上に於て此二つの相異なる思想の間に一言の解釋もないのは事實である。それは一つは社會主義の思想であつて、一つは個人主義の思想である。社會主義の思想は彼の國家論に現はれて、引いて議會憲法を要求するの聲となり近世の國家を建設した、個人主義の思想はエミールに現はれた、彼は個人性を制限する全ての制度と組織とを否認した、則ち彼は一方に於て或組織を是認しながら一方に於ては絶對的に之を否認した。此個人主義の思想は民主主義の發達に壓せられて振はなかつたけれども、縷々として連續して十九世紀の末に至つて、民主主義の弊に乗じて大に勢力を得て來た。

自然主義の青年が皆個人意識の爲に激しい煩悶を感じて、其情意を壓する全ての權威を無視して居る點に於て、ルーソーの思想の間に消化さ

れないで含まれて居た社會主義と個人主義との思想が、自然主義の青年に於て始めて調和されて現はれたやうに思はれる。
之を要するに文壇に於ける自然主義の聲は、現代青年の胸裡に鬱勃たる新生命が流露して文藝の上に現はれたものであつて、自然派に屬する青年作家に於て、更に其作物に現はれて主人公を通じて、自分はありありと一種の虚無的思想を窺ふ事が出来るのである。

神様は人間の食料として鯛を作られたと同時に、蚊の食料として人間を作られた。

(小剣——その日くしより)

藝術小觀

一 創作的衝動と創作的情熱

性來の盲人が、何等色彩形狀に關する觀念なきが如く、詩に小説に繪畫に彫刻に、絶代の天才が、如何に想像の翼を驅りて、幽遠の材と玄妙の想とを捉へ來らんとするも、其の達し得る處は、竟に自己經驗の觀念以外に飛翔する事能はず。自己の經驗を反省し、批評して、其の經驗がやがて人類を一貫する永遠普通の弦線に觸るゝものなるを自覺したる時、感興は油然として衝動的に來る。これ藝術のよりてなさるべき創作的情熱にして、此情熱の作の全體にわたりて伏在するを、吾人は稱して生命ある作品となす。

人類の中心を一貫する永遠普通の弦とは、これ吾人が先に明かにした

る『人道』也。吾人が今藝術の第一義を以つて、創作的情熱におくといふも、それは決して或具體的の主義、理想を表白せんが爲になされたる作品を云ふにあらず。ルーソーの『エミール』ゾーラの『勞働』の如き作が、一世を動かすの力ありしとせば、其の藝術上の價值は、自然主義、社會主義といふが如き具體的の主張に存せずして、自己の社會に於て得たる經驗に鑑みて、更に新しき理想を表白せんとする感興其ものにあり、情熱其ものにあり、而も其の情熱が人道に觸るゝ事深ければ深き程、作の生命は不朽にして、人類同胞の自覺を喚ぶ事大なる也。

二 實寫主義の根底

自己が過去の生涯の暗黒なる經驗を反省して、慚恨の情禁する能はざるものあると同時に、人類幾多の經驗に照して、其の自他、共通の苦悶、煩惱なる事を自覺したる時、作者は淺薄なる羞恥の念を脱して、人類が

向ふべき徑路を描出せんとして、所謂實寫主義は來れり。自己の内的生活の暗黒面を忌憚なく、大膽の筆に自白し、懺悔せんとする、文學上の傾向は、十九世紀に於て尤も現著となり來れり。これ則ち人類渾一の自覺が、作者を驅りて、茲に至らしめたるもの、讀者は之を通じて、人道の光に觸れ、四海同胞、神人合一の觀念に到達すべき也。

曾て政府は美術館の裸體畫に腰卷を命じて一世の嗤笑を招きたり。されど我が文壇に於ける、實寫小説批難の論據は、極めて淺薄にして、其の迷妄、腰卷政府の上に出づ。實寫小説を標榜して、文壇に旗幟を樹つる作者にして、創作の動機、華族若様の寫眞道樂以上に出でざるものあり、共に痛嘆すべきかな。

三 様式と技巧

藝術的才能は極めて直覺的にして即興のもの也。作者に創作熱あり、

而して後に、其表白の様式と技巧とを熟慮するといふが如き性質のものにあらず、様式は内容の使者也。

然れども、吾人は決して、様式と技巧とを、藝術の王國以外に放逐せんとするものに非ず。寧ろ吾人は人類の或時代に於ける思想の傾向、生活の状態が、或は抒情詩時代といひ、或は劇曲詩時代といひ、或は批評詩代といひて、其の藝術の様式に現はさるゝものなることを信ず。絢爛なる元祿時代にありては、其の一代の思想も生活も、萬人を通じて、劇詩中のものなりし也。見よ、現代に於ける人類の精神物質兩生活の状態が如何によく、實寫主義と批評主義とによりて表白されつゝあるか。此の如くにして吾人は、其時代が表白の様式によりて尤も明瞭に説明さるゝを認る也。

今や實寫主義全盛の時代也。されどわが徒は必ずしも實寫主義を以て、

かの印象主義、夢幻主義の上に置かんとするものに非ず。『沈鐘』の主材は、獨逸在來のお伽話なりき。其の表白の様式は、極めて壯嚴なる古調也。されどハイリツヒは現代の人也、あくまでも現代の青年也、其の煩悶と苦惱とは、吾人が日常生活の間に於て、切々に感じつゝある苦悶也。吾人は夕ぐれウオル河の畔に立ちて、北歐平原の風景を朦朧たる陰霧の裡に望むが如き、ゴルキーの印象的表白法の中にも、尤も明瞭に、著者其の人の經驗と個人性とを窺ふことを得べければ也。

四 藝術と社會

靜止すること鏡の如き水の内にも、『物に觸れて鳴る』といふ、性質は既に存する也。されど水を激して聲あらしむるものは、巖也。水の鳴るてふ性は、これを激せしむる物體を外にして、論じ得べきにあらず。藝術を通じて流るゝ人道は恰も水の『性』也。其の表面に現はれて現著なる

色彩を施し、傾向をなさしむるものは、其の時代の社會状態にして、まさに水を激せしむる巖の如き也。

讀者は藝術を通じて、よく其の時代の社會問題に接觸する事を得べし。

『金色夜叉』『不如歸』はつ姿』『良人の自白』を通じて等しく含蓄されたる、時代の叫喚と、社會の紛糾とは、著しく作を彩色して、明治文學の傾向を示せり。されど其の根底に横はれる人道に至りては、西鶴、近松馬琴、春水の諸作を通じて一貫せり。『アンナ、カレニナ』にも、『海的女』にも、殆ど同一なる家庭の紛糾、結婚の苦痛現はれ來る。

されど著者の創作的衝動のよりて來る所は、此社會現象に存せずしてホーマーの詩にも沙翁の作にも一貫して流通せる人道其ものにあり。

吾人は此の如く作の表面を彩色せる時代の傾向を捉へて、作の輕重を論ふの愚を取てするものに非ずと雖も、苟も作者にして、人生人道に對

する深刻なる感興と、眞摯なる情熱とを以て筆を染めんか、其の表白の様式が印象的になると、夢幻的になると、寫實的なるとを問はず、其内に時代の傾向が明に看取さるべきものなることを信じて疑はず。其の然らざるものゝ如きは明に作者の動機の淺劣、卑近なる事を證するものとして、極力排斥せんと欲する也。

五 藝術と文明

藝術は人類を摠じて、『四海同胞』の觀念に導くべき、連鎖也。尤も直覺的に、尤も深刻に、人類の向ふべき共通の方向を指示するものは藝術也。科學は理性的に人類を合一せんとし、藝術は感情的に人類を統一し、進んで神人合一の觀念に導かんとす。

藝術は人類共通の言語也。感情を表白して、感情に憩ふる無聲の言語也。吾人、共通の苦悶に、悲哀に、歡樂に、愛憐に、無限の感興に融

和せられて、白人種も、黄人種も、作者も、讀者も、共に人道の光にうたれ、無我の境に彷徨する時、科學も哲學も、到底よくなし能はざる偉大の感化は現はるゝ也。吾人が藝術の價値を批評すべき標準は正に此の感化力の大小にあり。吾人は此點に於て藝術を以て内部より文明を指導すべき唯一の利器と觀する事が、決して其の神聖を冒瀆し、其の獨立を危くするものにあらざる事を信じて疑はざる也。

高輪泉岳寺から二本榎の方へ行くには、墓地を通り抜けるのが近道だ。興々たる石碑の半ば倒れたるもの、全く倒れたるもの、紛然雜然として、どれが誰れの墓やら分からぬ。半ば倒れたる一墓碑に「紅顔院妙香芳蕙信女、行年十九歳」と書いてあつた。

(小劍「その日」より)

ヒューマニチーの解義

帝王に膝まづく奴婢の如く、怒濤に呑まるゝ青芦の如く、人は外部より律せらる、宗教上道德上の形式的眞理の前に、永遠の奴隸たらざる可からざる乎。換言すれば世に絶對的の眞理なるもの有りて、外界より嚴然たる法則の下に、人を制裁し得るものなる乎。更に人は道德の斧、眞理の槌を揮つて他を律せんとする事を得る乎。夫れ人道とは果してかくの如く人生を離れて絶對的に存在し得べきものなる乎。

吾人は飽くまでも人生が人道を支配し、眞理を左右し得るものなる事を信じて疑はず。姦淫せる女を殺せよとは、これカイザルの『法』にして、人道に非る也。神の法に非る也。

人生こそ宗教上道德上の眞理を律すべきものなれ。而もその人生は決して夢の如く泡の如き個人の一生に非ず。また一人の英雄、一人の天才が花々しき活躍の舞臺に非ざる也。時間と空間との羈絆を放れて、古往今來、幾多の人類——天才も凡夫も、美人も醜婦も、學者も乞食も、キリストもイヤゴも、釋迦もシャベルも、等しく嘗め來れる經驗の連續也、過程也、徑路也、かくして成れる萬人の經驗、聖きも、卑しきも、樂しきも、悲しきも、集め來り、積み來たりてなせる成熟は、やがて美はしき人道の光也。寔に人道は一人の聖人、一人の天才が創造に成らず、凡人の卑しき、悲しき經驗もまたその光の要素也。これ眞理の根底に炎々たる人情の熱火の伏在する所以也。人情を外にして人道あらんや。吾人は石をあげて、罪人を撲たんとする道德家や、一片の絶交状とともに

百年の友情を捨てんとする宗教家の多きを見て、轉た慨嘆に堪えざる也、蓋し、此の萬人の悲しき卑しき經驗に對して、普遍的の同情を濺ぎ得る者が、やがて文學上、政治上の天才也。

三

ゲツセマネの暗にひれ伏して禱れる崇高の姿にも、バトモスの荒磯になげき瘞るゝ苦悶の面にも、慾情多く、妄念強き凡人匹夫との共通の煩悶悲哀を認めざる可からず。

人が偉人崇拜の惡酒に昏醉するや、彼れを以て人間以上の人間と思推し、双手よく時代の大勢を開展し、新しき歴史の頁をかへし得たりとなす。されど偉人が双手を擧げて、野に叫ぶや、正に時代萬人の新生命が勃々として中心より衝動し來るの機也。云はんとする確に表白し能はざる萬人の希望、萬人の苦痛、萬人の歡喜が、天才偉人の聲をかりて表

白はくされたる也。

世よに冷淡微温れいたんびおんの人あり、博識はくしきがりあり、時にモツブの輕佻けいてうを罵り、雷同どうどう附和ふくわを嘲あざわらるものありと雖も、これ天下てんかの秋あきに對して、一葉かひかの階下かいかに落つるに驚おどろき、聲こゑをあげて千樹萬樹せんじゆばんじゆの搖落ゆらくを止めんとする者也。わが徒たは無教育者むけいよくしや、無頼むらいの徒たが、時代たいていの大勢たいせいに暗くらく、自己じこの苦痛くつうの由よして來る所を達觀たつかんする能あたはず、その代辯者たいはんしやの聲こゑを聞きて、一齊いつせいに蹴起けつきし來る聲こゑに、深遠しんえんなる人道じんどうの絶叫けつけうを聽取てうしゆせずんばあらず。

社會けいは決けつして英雄えいゆうのみの社會けいに非あらず、歴史れきしは決けつして英雄えいゆうのみの歴史れきしに非あらず。凡人ふじん共通きんこうの生命せいめいに美うつくしき人道じんどうの光ひかりは宿とどる。

四

曾かつて赫々かくかくたるトロイの英雄えいゆうを通つうじて歌うたはれたる人生じんせいは、今いまや、淋まひしき漁夫いさなの孤兒こじによりて表あらわはさるゝに至いたり。オヂブス、アガナムノン、ヒ

ルデブラレド、クリムヒルデの武士道ぶしどう的苦悶くるもんは、憐あはれなる鑄鐘師つりかねしや、住すの江えの蛭むさが子の理想りゆうきやうと現實げんじつとの衝突きつごつより來る家庭かてい的煩悶ぼんもんによりて描出べうしゆつさるゝに至いたり。ラオーコンヤ、ヨブのアゴナイジングは、ネクドリユーフやマルクヤ、ヴロンスキヤ、ジャンの如ごとき、凡夫ふんぷの心的經驗しんてきけいけんによりて細叙じよさるゝに至いたり。

見みよ、自然しぜんの心こゝろは、つれなき牧童ぼくどうの手に刈かられて、爐ろの下したに投げ入いらるべき名ななし小草せうそうの花はなにも、貧ひんしき市人いちびとの手に捕とらへられて、二羽ふたはねの價あ僅まじかに一錢いちせんに售うらるゝ小雀せうさくのそれにも啓示けいしさるゝ也。

吾人われはまづ、『我われは何ぞや』の問題もんだいに觸ふれざる可べからず。かくして得たえる自覺じかくは、我われにもキリストにもヨブにも、共通きんこうの悲哀ひあひと痛苦つうくとありて存ぞんずるを知るべく、此この如ごとくにして吾人われは自己意識じこいしぎの階壇かいたんを昇のぼる也。既すでに自じ己意識じこいしぎの境きやうに至いたる者もの、豈いかでに獨ひとりり自己じこを中心ちゆうしんとして、他たを律りつせんとする

の驕慢に陥るものあらんや。茲に於てか、人は敬虔の胸を開いてそこに
普遍にして永遠なる人道の光を認る也。

吾人が文學を通じて人道の光に觸れんと告白したるもの、蓋しこれ也。
吾人の人道主義はかくの如く極めて平々たり。凡々たり。

外套の裏は襦袢。羽織の裏は甲斐絹。着物の
裏は金巾。 (小剣)「その日く」より

プーシキン

一 北歐文壇の曙光

中世の社會をあの古池の水が腐りかけて、油を流した様に、ドンヨリ
とした景色に譬へて見ようものなら、其當時の社會を支配した、煩瑣な
形式主義は底なし沼の泥一面に蔓つた黒い萍の様なものであつた。けれ
ども現象流轉の數にはもれず、此古池の水にも一ツの革命の石は投げ込
まれた。波紋は佛蘭西を中心として、大きい輪を描いて歐洲の舞臺を卷
いた、其波紋の遠く幽かに及ぶ所は北歐高原の陰鬱な霧を分けて、牧笛
の聲、東西を失する露西亞の大氣にまでも響いたのである。教會嗅い、煩
瑣な文學の列をかき分けて、プーシキンの艶麗な併も平易な抒情詩は露
國の文壇に現はれた、彼の詩の特长は、形體の絢爛なものと表白の極めて

輕妙な點にある、彼の晩年の作を除く外は其思想の高邁と深刻とに於てゲーテや、シルレルや、シエレーや、バイロンに比して輕い上調子な傾きは免れ難い、けれども詩形の妙に至つては決して何者にも劣らない。プーシキンとシルレルを比較する、恚ういふと讀者は皆まで言はないで、夫れはシルレルは壇が違ふ、あの深刻な哲學的的人生觀はとても淺薄なプーシキン等の企て及ぶ處でない云のであらう、けれどもプーシキンが其作の上によく自分の個性を印象した點に於て、其感情を巧妙に表白した點に於て、確かにシルレルと雖一步を譲るべき處がある、一言にして云へばプーシキンはシルレルと比して、寧ろゲーテに近い方であつたのである。

二 別莊の貴公子

プーシキンはモスコーの貴族の家に生れた。彼の母はアメリカ印度系

の非常な美人であつて、ピーター一世に侍つた、或ニグロの孫であつた。プーシキンは此母を通じて多少其血脈を受て居た、彼の父は當時の貴族社會の流行兒であつた、浮華な生活に耽溺して絢爛な佛蘭西文學を好んで、金に任せて露佛の名著を其書齋に積み立て、誇つて居た、さあプーシキンはかゝる家庭の若君と生れた、我國で云はうものなら差詰學習院へ自轉車でお通ひなすつて、日曜には寫眞器を提て無中に遊んで歩くといふ格だ、處が露西亞の貴族は日本の華族なんかとは譯が違ふ、プーシキンの祖母と乳母とはプーシキンの幼時の教育に最も力をつくした。彼は都の近郊の別莊で永い冬を送つた、宛然目白か目黒か大森邊の華族の別莊とでもいふ處だらう、夜永のつれづれに拾ひ集めた栗を爐の邊で焼き乍ら色々様な趣味あるお伽話を聞いて此天才的貴公子は其うら若い頭腦に、可愛らしい空想の翼を張つた、他日露國文壇に新生面を開いた、

簡易明快なる言語はプーシキンが此間に乳母より受ける所が非常に大であつた。

彼はペーテルスブルグの學校に於て教育をうけた、まだ校門を出ない前に彼は已に有望な青年詩人として其名聲を博して居た。教授ズコウスキーが、別離に臨んで彼に自分の寫眞を送つて『其門生にうちまけたる教授より』と記した事に就ても其一般を知るに足るのである。けれども感情的のプーシキンは竟に歩を誤て墮落の途に轉じた、彼は其良友を捨て、當時腐敗を極めた貴族社會の貴公子と云ふに堪えない生活を送つた、之彼が晩年の傑作『エツゲニー、オネギン』に自白する處であつて自己の罪惡の大膽なる懺悔を文學として表白しようといふ近代の傾向は既に露西亞に於てもプーシキンが其緒を開いたのであつた。

三 荒原の遷客 冬宮の失戀

既にしてプーシキンは當時の少壯政治家と交り驕激なる自由論を稱へて、貴族政治と君主專制とに對して少からざる反對の語氣を漏したのである、『自由の歌』を初として、彼は革命的精神を鼓吹せる幾多の小詩篇を公にした、一八二〇年彼は竟に有司の怒に觸れて、當時甫めて二十歳にしてキシネフに追刑に處せられた。キシネフは先年有名な慘劇の行はられた處で誰でも知つて居る、けれども此時分はまだ極めて、不潔な淋しい一小邑に過ぎなかつた、彼は此處で同囚の無賴漢に投じて憂鬱な日を送つて居たが、幸にして程なく許されて、シリミヤ、コーカサス地方に旅行することゝなつた、想へ、紅顔やせて肉落ちた、蓬頭蒼面の青年公子が、飄揚として、白葦黄茅の平原に嘯きくらして、胸にあまる綺愁清怨を、其織麗な文字に彩なした、其淋しい草枕を、彼は多くの詩篇を懷にしてオデッサに行かうとした。

彼はオデッサに行かうとした、けれども時の政府はそれを許さなかつた。彼は再び中央露西亞に召喚されたのであつた、蓋し政府は彼がオデッサに行くことになつて、バイロンの跡を追うて、希臘獨立軍に投せんする事を慮つたのである。召喚されたプーシキンはブスコヴ州のミカイロヴスコヤに閑居して著作に日を送つて居た。一八二五年の十二月の十四日にはペーテルスブルグに於て再び暴動が起つた、暴戾虎の如く狼の如き露國の警視廳は其醜劣な卑窟な猜疑の眼を閃めかして戒嚴令を幸に、至る所新思潮に浴して居る詩人論客の寓居に踏み込んで、好い加減に家宅搜索を始めた、プーシキンは早くもそれを知つて自分の熱情を濺いだ、詩歌の原稿を大かた火に投じて仕舞つたので、辛じて此狼の難を免るを得た。

其後彼の名聲が非常に高くなつたのでニコラス一世はプーシキンを容

れてペーテルスブルグに召し出して、自分の詩歌の師匠と仰いだが、次で冬宮の管房長に任命した。プーシキンの一身の事情からいふとどうしても此命を辭する事が出来なかつた、否彼は此任命を一言の下に拒絶して了ふといふ程の強い人ではなかつた、プーシキンはこれから煩悶の多い不愉快な日を送つた。何れ晚かれ早かれ彼は其生活を免れなければならなかつたのであつた。此生活の間に彼は容色絶美の一貴女と結婚した、けれども輕薄な浮華な此美人は到底プーシキンの天才を認る事が出来なかつた。一八三七年憐れなるプーシキンは此妻の事からして、他の男と決闘して最後を遂げた。時に彼の年僅かに三十有五。

四 戀愛の詩人

彼が學校を出て第一に筆を執つたのが『ルスランとルドミラ』といふ一篇のお伽話を詩にしたものであつた。ルスランといふ主人公がルドミラ

といふ佳人と結婚の祝宴が終へて共に疲勞しつくしてしまつた頃に、忽ち四邊暗淡として、そこへ現はれた黒海の岸に住んで居る恐ろしい魔法者の爲に誘拐されて行方知れずになつてしまつてしまつた。そこで花婿のルスランは妻の跡を追うて他の三人の男と馬に股つて旅行の途に上る。此一隊の物語からして、全篇が仕組まれて、千波万波の經驗を嘗め盡して最後にルドミラと邂逅するといふ筋は、普通あり來りの極めて平凡なものであつたけれども、其筆致は實に露國文壇に與へた破天荒の打撃であつた。これがやがて、最近の露國文學——實寫的簡易な素樸なものに加ふるに美妙な想像と輕快な滑稽を以て調和せる——の嚆矢であつてプーシキンは從來の、教會的、形式的の文字に代ふるに、露國の普通語を以て其詩歌の中に引入れたのである。茲に於てか、クラシツクの陣營からは彼に對して百雷の一時に落るやうな攻撃の矢が集まつて來た、けれども彼は勇敢

に戰うた、彼は曾て一度も其非難と迫害との前に節操を屈する事はなかつた。

詩形の簡明にして輕快なる點は實に彼の作に終始相通じたる特長であつて、吾人は十九世紀に於る英文壇に於ては獨りウォルズウォルスのみが之と酷似せるものあるを認るのである、されどウォルズウォルスは其筆致を以て靜謐なる、英國の田園の自然美を描寫するに用ひた、之に對してプーシキンは人生のあらゆる經驗を抒するに用ゐたのである。吾人はプーシキンの抒情詩に於て、殊に『戀愛』が最も美妙に歌はれて居るのを認める、勿論當時西歐の詩壇に於けるゲーテ、バイロン、ハイネ等が歌ふた理想と現實との衝突より來る深刻なる煩悶や高調な悲哀に比しプーシキンの作はさうしても輕調な皮相的な處の有る事は確である、之は西歐に於ては政治上社會上の大擾亂が眼前に演せられて、人類發展の危機は

焦眉の急に迫つて居た爲、此直接の刺撃をうけたからである、けれども露國に於ては、漸く革命の思潮の胚胎する時であつてまた彼農奴問題の如きは其の端緒を開かうとして居る時であつた。彼は此時に當つて人類の中心に不斷の火を點じつゝある『戀愛』を其奔放の筆に任せて歌ひ出たのである。

五 北歐のバイロン——傑作の梗概

露國人は一聲にプーシキンを呼んで、露國のバイロンと稱した。彼は慥かにバイロンが西歐の社會の俗悪なる生活を痛撃した筆致に學ぶ所があつた、けれども吾人の眼から見るとバイロンの狂熱に比して彼は慥かに皮相の觀を免れない、殊に彼の晩年は漸く貴族生活に慣れて、當時露國社會の裏面に其熱度を高めようとして居た大問題に筆を染むるに至らなかつたのは、吾人の深く恨とする處である。

要するに彼の最も著大なる功績は彼がなしたる舊來の形式主義の打破と、新國語の供給とであつた、其日常生活の極めて、平々凡々たる事實を捉へ來つて之を天才的の創造力に彩なすに至つて讀者は恍惚として身親しく其境に在るの感興に堪えなかつたのである、ツルゲネフ、トルストイの作の由て來る所を知らんとするものは、まづプーシキンを學ばなければならぬのである。

プーシキンの晩年作に於ては漸く人生に對する深刻な含意が現はれて來やうとして露國の上流社會の生活は其大作『エヴゲニー、オネギン』に於て最もよく描寫されて居る。時にカザリン二世の治下に於て彼は農奴問題の歴史に筆を染めて後來大に新生面を開かうとしたが、其の夫人の事からして無慘の横死を遂げる事になつたのは眞に痛恨の至りではな

いか。

最後に彼の傑作『アフゲニー、オネギン』の梗概を紹介して見ようと思ふ。

オネギンといふは本篇の主人公の名で未だうら若い貴公子であつたが當時露國の貴族社會を最もよく代表する人物であつた。公子は流行として一部分は佛蘭西風に一部分は獨逸風に極めてハイカラな皮相淺薄な教育をうけた。彼は年僅かに十九歳の時に既に其父君の莫大なる私有財産を相続することになつた。勿論其私有財産といふのは例の廣い土地で、其土地にはサーフといふて土地に固定した農奴がある。此農奴の膏血を絞つて貴公子は朝から晩まで遊蕩に口を暮して行くのである。彼はペートルスブルグの交際社會に於ける流行兒であつて、朝は遅くから床を出でボンヤリと自分の部屋の机の上に置かれた處々方々からの、宴會や夜會の勧誘狀なんかを見て行くのが、お務めであつた。貴公子は頗る劇通

で樂屋なんかに入浸つて多くの俳優と懇意になるのを無上の光榮として夜も晝も大部分は豪者を極めた料理店や待合で、同じ年配の貴公子と集まつて、バイロニズムの皮を被つて、不健全な娛樂にばかり耽つて居た。或る夏をオネギンはさる片田舎の別荘に送つた。此處で彼は其の近傍に住んで居た、一人の詩人と交を結んで此の青年からして獨逸のローマンチズムの氣焔などを聞いて非常に感激して毎日の様に理想を語りあふて暮して居た。處が此村に古い郷士の後家が住んで居た。公子と詩人とは何時とはなしに此の後家に懇意になつて、朝夕其家庭に出入する様になつた。處が此後家に二人の娘があつた。姉をタチアナといふて妹をオルガと呼んだ。けれども二人の性質は非常に違つて居た。妹の方は無邪氣な、氣輕な愛嬌の好い、極めてあざやかな娘であつた、かの青年詩人は此娘に氣も狂はしい程、はげしく戀して居た。姉の方は妹とは全く變

つて詩的な、同情に富んだ、内氣な才氣ある娘で、ブーシキンは彼の力をこめて此姉の人格を表出しようとした。タチアナは其優しい深い情をこめてオネギンを戀した。けれどもオネギンは此淋しい田舎乙女の戀を眞面目にうける様な純潔な青年ではなかつた。彼は幾度か都の花に戯れて、紅を品し紫を評し、疎狂奔放な生活になれた男なので、今此憐れな娘の戀さへも戯れごとの様に喜んで仕舞つたのである。此時田舎の小さい夜會の舞踏で、公子は、ふと妹オルガの晴々しい姿に情をよせた。もとより情緒の單純な乙女心のオルガは此優しそうな美しい公子に注意されたのを少なからず喜んだ。青年詩人の煽はむら／＼を燃えて、きのふまで無二の朋友として朝夕、夢のやうな理想を語り合つた公子に今は一片の決闘状を送つたのである。悲惨な決闘は行はれた、公子は計つて青年詩人を殺してしまつた、公子はもう此地に留る事が出来ない、飄然として都の空

に遁れ去つてしまつたのである。

タチアナは胸にある悲しみに堪えかねて一時は病床の人となつたが、やがて恢復して、せめてもの心やりに公子の別荘に行つて、其處の番人と親しんで、戀しい人の書齋に閉ぢこもつて讀書に悶々の情をやつて希望なき日を送つて居た。さてタチアナは母の懇願もだし難く心ならずも田舎を捨て、モスコーに出で、此處に名高き老將軍と結婚してペーテルスブルグに住む事となつた。彼女の天性の美質は都の風にしみて華々しい貴族社會の花と歌はれるやうになつた。タチアナの氣高い姿と天性の才氣とはあはれ上流社會を通じて至る處にもはやされたのであつた。かくて程經てオネギンはさる夜會の席で昔我を戀して胸にあまる涙を濺いだ、タチアナの打つて變つた神々しい姿を見て、何とかなしに深き／＼感慨にうたれると共に、新しい火のやうな戀の煽は公子の胸を衝

いてこみ上げて来た。公子は幾度か主あるタチアナに苦しいく自分の胸を云ひ寄らうとした、けれどもタチアナは石の様に冷淡である。公子は幾度か血を吐く様な情をこめた手紙をタチアナに送つた。けれども主ある婦人は何の返事もかき送らなかつた。公子も今は堪えかねた。或日折を窺つてタチアナの邸に忍び込んで、彼女の部屋に窺ひよつた。見ると彼女は今公子が心をこめて送つた手紙をヂツと見詰めて、深き憂ひに沈んで居る。其眼には、美しい涙の雫が宿つて居る。オネギン今は矢も楯もたまりかね、我を忘れて、タチアナの前にひれ伏して、苦しい悶え死なむばかりの述懐をした。タチアナは公子に只一言の答をした。此力ある一言の答で此長篇の抒情詩は終結して居る。

タチアナが公子に與へた最後の一言は深く讀者を動かして、當時の上流婦人が交際場裡に於ける一種の流行語となつたといふのに徴しても、

此書が如何に愛讀されたかを想像するに足る。
プーシキンの詳傳はもと三十八年十一月「火鞭」に掲載したるものにして、今より見る時は頗る杜撰を極めたり。後に至り學士八杉貞利君のプーシキンに關する精細なる著書あり就て見るべし。

荒 涼 小 劍

(一)

予が性癖は、漸く簡易を去つて荒涼に移らんとしつゝあり。荒涼若し趣味と云ふを得べくんば、予は實に荒涼の趣味を愛す。世に若し荒涼の美と云ふものあらば、予は實に荒涼の美を喜ぶ。

(二)

晩冬の夕、予が住める目黒の里の小高き丘に立つて、武蔵野の平原を望めば、一望数十里の枯野は、赤無く、青無く、只灰色の遙に天と連れるのみ、霞を交へたる寒風は横に面を打ちて「蕭殺の氣は大空に充ち、凄惨の情轉人に迫るものあり。この時荒涼の美は天地を掩へり。予は荒涼の美を喜ぶ。

レルモントフ

一 英人の血脈

暗淡たる濃霧にまぎされて居た露西亞の文壇は抒情詩人プーシキンによつて一道の光明を投げられた、プーシキンに次でゴーゴルが其精巧な寫實主義と美妙な自然主義とを提げて文壇に現はれ、茲に全く中世紀の形式主義を離れて、近世露西亞文學の基礎を固めたのである、プーシキンを紹介した記者はゴーゴルの批評に遷るべきが順序であるけれどもゴーゴルに就ては昇曙夢君の精細な著述もある事であるし、限りある頁で、自分の本意もつくされないから、プーシキン、ゴーゴルと同時代に生れて北歐文壇の一異彩として稱へられたレルモントフを紹介して見たいと思ふ。

レルモントフの系統には多少スコットランド人の血精が流れて居た。彼の祖先はジョージ、レアーモンズといふスコットランド人で甚だ不明ではあるけれども何等かの職務の爲に六十人のスコットランド人と愛蘭人とを卒ゐて、露西亞のポーランドに移住した者であるといふ事だ。彼の

母は蓋し非常なる詩的趣味に富んだ、否寧ろ女流詩人といふ風の人であつたに違ひない、彼は三歳の時に此母を失ふた、彼の母は此時僅に廿一歳のうら若い婦人であつた、母方の祖母は露西亞の貴族階級の人であつたが三歳のレルモントフを引き取つて養育した、祖母は極めて貴族風の人であつたので、彼は貧しい陸軍士官であつた其の父と離隔せられて深窓の貴公子として、育て上げられて、種々な家庭の教育をうけて居る内に其文學的天才は著しく發揮されて、十四歳の時にはもう文を綴り詩を作るに至つた、彼は十六歳にしてモスコウ大學に入つた。

二 自由の渴仰——迫害來

彼は初にシエークスピヤとシエレーとを崇拜して、後にバイロンとシエレーとを愛吟するに至つた。彼が大學に入つた翌年の事である、矯激なる青年詩人は平常甚だ不快に思ふて居た冷膽死灰の様な一人の教授と

激しい衝突をして、此處に留學するに忍びない事となつた。飄乎として學校を捨てた彼は十八歳の時騎兵士官たらん事を希望してペーテルスブルグの士官學校に入つたが、一八三七年彼が二十二歳の時である露國文壇の北斗ブシーキンは、非命の最後を遂げた、此の時彼が公にした一片の詩は實にレルモンツフが熱烈なる自由の渴仰者であると共に、壓制者の仇敵であるといふ事を、天下の人に公認さるゝに至つた始である。此詩の中には次の様な熱火の絶叫が含まれて居たのである。

されど汝、王位を圍む傲放のやからよ、汝幾度か其兇暴の手をのべて、わが自由の人、天才の人、名譽の人を空しく絞首臺上の露と消えしめたるよ、今ぞ汝法律の下にかくれて安き眠を貪り、正義は汝の前に唇をかむて其聲を呑むとも、見よ、われ等の大神が最終の審判あらん日を——はかなき輩かな、いさ殿なる判官は、傲放かぎりなき汝を待てり、その目その時汝いかに悶ゆるとも、黄金の光は此判官の眼を眩ます事能はじ、——汝の黒く汚れたる血を以てして、紅燃ゆる詩人の血の痕を拭はんともよも能ふまじ、傲慢のやからよ。

此熱烈な快文字は數日ならずして、露西亞國民の口より口に胸より胸

に高い潮の音を立たしめて、暫くの間にも其暗誦する所となつた、何處ともなく印刷された此詩は、さて何處ともなく露國社會の秘密の底の底を矢の様に速やかに擴がつて行つたのである。

血をこめた彼の絶叫は忽ちにして恐ろしい露西亞の警視廳の陰險な猜疑心に觸れた、露西亞の警視廳といふ奴がまた實に殘忍兇暴な云ふに忍びない卑劣な手段を弄する専制機關なので、非常な皮肉な迫害を受けた上に彼は其職を奪はれて西比利亞に追刑に處せられようとした、處が折よくレルモンツフの友人に政府の權力者があつた爲、態よく取倣して呉れて、近衛兵から轉じてコーカサス地方の旅團に轉任を命ぜられた、彼は茲に京華を辭して邊境遠く漂零の愁客とはなり果てたのである。

吾人は北歐文壇の天才が大かた貴族社會から生れて、而も平民の爲に壓制を痛哭し、自由を渴仰して、一身の犠牲を意としなかつたのを見て

も、少し教育をうけて天才的の傾向を帯びたものが、虚偽と形式の權化ともいふべき煩瑣な貴族生活に堪え得べきものでない事を知るのである。そんなちよそこの貴公子諸君、少しく露西亞の貴族に鑑みる所があつてほしいものではないか、諸君。

三 コーカサスの自然——美人郷

吾人は今やコーカサスの自然美を語るべき機會に接した。コーカサスは世界に於ける尤も麗しい風景の一であらう、有名なアルプスよりも更に雄大な山脈は、遠く一空を摩して、其山脈の裾ははてしもない幽巖な深森大澤である、氣候は南部の性質を帯びて乾燥期に至ると、大氣は澄みかへつて、透明な玉を隔て、見る様な琉璃色の遠山が、千變萬化の色彩を呈して實に言はん方なき眺望である、冬の日茫莫たる濕野を横ぎつて遙かに巉々たる山脈を望むと、黛藍色の大空を背景として、大理石の

巨人が夢を忘れて眠つて居る様な白皚々たる連峯が、美しい日光に反映して云ふ可からざる印象を人に與へるのである。山の中腹は一面に半熱帯の植物が鬱蒼として繁茂して、橙黄橘緑の村落が、其喬木の間に隠見して居る。此靜謐な自然の裡に生活して居るコーカサス人は恐く歐洲中で尤も美しい人種であらう、けれども此平和な村落にも恐ろしい残忍兇暴な惡魔の手は下されて居る、此頃露西亞人は頻りに平和の仙境を侵して掠奪を恣にしたので、村人は必死となつて頑強なる抵抗をして争闘を續けて居たのであつた。

詩人レルモントフは此コーカサスに漂零の客となつた。此處は彼が十歳の時暫らく滞在して居た事のある地で、なつかしい森や、山や、野や、水や彼は此美なる自然に對し、昔を想ひ今を偲んで感慨のいかにも禁じ難いものがあつたのであらう、胸に餘る紅恨と紫愁とをかの幽麗な筆に彩

なして歌ひ出でたのである。此間に於ける彼の作に表はれた自然美の絶妙なる描寫と其印象とは、彼の友人であつてまた彼の詩を獨逸の文壇に紹介したボーデンステットをして、『數卷の地理書を讀むよりは遙かに勝れり』と嘆せしむるに至つた、評者は精しくコーカサスの風景を知つて居つた人であるので、之は決して過賞の言といふべきではない、ツルゲネフは毎に沙翁の『レアール王』の中に現はれて來るドーバー海岸の風景の描寫を以て詩篇の中で尤もよく海岸の自然美を表出したものであるといふて評して居る、けれども自分はいかにあの叙景を讀んで見ても、ドーバー海岸から見た風景、日光に映じて起る洋水の深いく、美がまだ充分に寫象されないのである、此點に於て自分はレルモンツフほど自然美に深い印象を興へた詩人を見ないのである、ボーデンステットが、『科學者と藝術家とを同時に満足せしむるもの也』と評したのは最も適切の言といふ可きである。

而も此繪畫の説明に對する様な叙景が、驚く可き巧妙の韻律によつてなされてあるからたまらない、簡易明快といふ點に於て彼はブーシキンに一步を譲る處があるけれど、確に彼は此音樂的の韻律に於て勝つて居る、彼の詩は美しいメロデーである、由來露西亞語には、多少此音樂的の性向はある、けれどもレルモンツフの詩を通じて見た露語はまさに伊太利語の如き感があるのである。

四 奴隸道德の破壊——『ミチユーリ』

レルモンツフの詩的方面は他の詩人に比べてシエレーに劣るものがあつた勿論彼はシエレーの作に少からず同情と尊敬とを拂ふて居た、けれども彼はシエレーを模倣する事を敢てしなかつた、彼の早い頃の作には確に彼がブーシキンをブーシキンのバイロニズムとに憧憬して居た

形跡が見へる。

程なく彼は自己の個性に立ち歸つて、現世の道德に對して少からず、煩悶を懷いて來た、大宇宙に於て常に善と惡とが争ふて居る如く、人間の心にも此兩者が常に争ふて居るといふ様な思想からして、詩人としてはシユレーの如く哲學者としては、シヨツペンハウエルの如く、現世の道德の根本的改造を夢みて居た、此當時の彼の傾向は尤もよく其作『惡魔』の『Mis'yii』の二篇に於て明かに表はされて居る。

『惡魔』は彼のデモニズムを歌ひ出でたもので、大に現世のキリスト教の奴隸道德に反抗して人間の虚弱な小心翼翼たる感情を嘲罵したものである、『惡魔』は尤も善き意味に於ての實寫的筆致によつて眼前に躍るが如く書きなされて居る。ダラルギアンの乙女が結婚の前夜其城中にて踏舞する處、盜賊と一處に花婿の入つて來る處、花婿の横死、愛馬の跑

躍、乙女の苦悶、奴隸道德の束縛からして惡魔の一舉一動に至る迄恐ろしい程精巧にもなされて居る。

『Mis'yii』は青春の情熱燃ゆるが如き青年の自由を渴仰する絶叫である、サーカシヤの山深き森の中から連れて來られて東西も知らぬ間にさる片山寺の中に人となつた一人の青年があつた、寺院の僧は朝夕の嚴肅なる生活の爲に此少年の感情や衝突が全く消滅され得たものと思ひ做してたのが、それは非常な誤解であつた、青年は漸々男らしくなるに連れて心ひそかに夕ぐれの窓によつて、楽しいなつかしい故郷の夢をくり返して、浮世の波を慕ふて獨り人知れず憂悶の胸をなやまして居たのであつた。なつかしい妹、戀しい父母の面影、彼はもう堪えられなくなつて來た、一夜雨風おどろしく吹き暴れて、淋しい山寺の夜はいと物すごい景色であつた、法主は物恐ろしさに堪えかねて本堂に出て祈禱を初め

た、青年の血は、風のすぎび、雨のとろろきに一入高まつて、フラクと法主の知らぬ間に戸外に跳り出て、暗に吼ゆる嵐の中に其影を没してしまつた、彼はこゝに生れて初めて自由を得たのである、彼の熱い血潮は胸に湧いて、全身は一種の力にみちみてをいろに肉のおのゝくを覺えた、『野獸の如く』森を駆けめぐつて、嵐と闘ひ、電光と争ひ、はては恐ろしい森の虎とさへも相搏つたのである、彼は此ものすごい戦にますますたけり狂ふて邁進した、けれども彼が道を失し方面を間違へて何處まで行つてもなつかしい故園の空に立歸る事が出来ない事を知り得た時に、流石の彼も多少の疲勞を感ぜざるを得なかつた。それにかたゝ加へて、猙獰な豹と最後の奮闘をして恐しい深傷をうけた爲に、呼吸も絶えぐゝになつて山寺に程遠からぬ處までさまよふて來たが大地に殞れて横つて居た、彼は山寺の法主に助け起されてハツと我に返つて其眼を見

はつた、今此世の呼吸絶えなんどせる青年は、苦しい聲を絞り上げて、苦熱の情を吐露した。

『墳墓とや、何ものぞ、われ人、苦しみ惱む時、卿等ひたすら其冷めたき永遠の寂寞に逝きて眠れと説けども、吾等いかで此人生を見捨て果つべき、——吾等少し、猶少し、——冷めたきかな卿等、青年の戀なる理想を知れりや、卿等の心にもかつて一度は愛と憎の焰の燃えに燃えたることありけんを、實に自然は卿等の如き無情の心せる輩によりて如何に其美を失ひたりけるよ、いかに心弱く恐怖にのみ満てる憐れの人々かな卿等何の希望もなく此世に活けり、さはれ吾等いかで此世を捨てんや。』

今死の手に捉はれんとせる青年は此の如く道學者と見るや苦痛も忘れて燃ゆるやうな氣焰を吐きかけてそれから彼は猶自分が森の中をかけり廻つた間の自然の美觀や、自由の樂しさ、さては猛獸と相搏つた時の壯

快な物語をいとも矯激な語氣に語りいで、『卿等はまことに吾、自由の日に於て森の中にてなし得たる壯快の事どもを知らんと欲せざる乎』と反問してガツクリ瞑目してしまふ。全篇に現はれた壯嚴な而も絢爛なレルモンτροφ獨特の詩形はとて吾人之を形容するの語なきに苦しむのである。

本篇の主人公はハウプトマンの『沈鐘』に現はれて来るハインリツヒと著しく同調の傾向を帯びて居る、單に内容の類似ばかりでない『沈鐘』と『浦島』と三篇合せて殆ど同じ様な詩形である、吾人は茲に現著なる時代精神を看受する事が出来るではないか、けれども『樂しかりける自由の口かな』と絶叫し、『我世の夜のさても永き事よ』と憤慨して死の瞬間まで、炎々たる情火に悶えて居る前二篇の主人公に比べて、浦島には昔の夢を悔て豁然大悟するといふ様な氣味が見える。此處に吾人はまた藝術の上

に印象された作者の個人性を洞察して深い趣味を感じるのである。

五 曠原の血痕

レルモンτροφの厭世主義もしくはデモニズムは決して消極的な失望より来る嘆聲でなくして、現世の奴隸道德を憤慨する積極的な熱罵の絶叫である。彼の作は技巧の外に大に讀者を感化する力を持つて居る、一八四〇年の頃からして彼の思想は漸く組織だつて、深刻なものとなつて來た、彼が更に新しい作に筆を染めようとして居た時に至つて、彼はプーシキンの後を追ふてこれも悲惨な最後を告げたのである。

彼は廿二歳の時からして熱烈な詩を作つて大に革命的の思想を歌ふたけれども一面に於て彼は深く故國を愛した、彼の愛國心は國家の暴力を崇拜する愛國者のそれとは大に類を異にして居た、彼の詩に恁ふいふ事がある。

「余は余が故國を愛す、されど其愛は少しく異れり、流れに漲る鮮血を賭して奪ひ來れる其名譽よ、惡むべき汚辱によりて成されたる其平和よ、噫故國のものすこき歴史、こはいかにしても余に樂しき光を與へざる也。」

彼の愛したる處は露西亞の田舎である、其農民である、其自然美である、殊にコーカサスの住民の如き彼が渾身の力をこめて同情の涙を濺いだのであつた。

狂熱の彼は、端なくも佛蘭西公使の公子とペーテルスブルグで決闘をしたので、再びコーカサスに流刑に處せられた、彼は此間ピアチゴルスクに滞留して不健全な社會に立交つて居たが、中にも士官マルチノフといふのはバイロニズムの上衣を被つて、若い乙女などを誘惑してはそれを弄ぶ事を誇として居た、彼は此士官と事を争ふて遂にまた決闘を約するに至つた、レルモンツフの彈丸は空しく外れて、此天才の惜むべき血潮は徒らに曠原一片の荊葉を紅に染めて幽冥の鬼となつた時に年廿有七。

投 書 家 論

投書家といふものあり、文藝に志すこと篤きも、文壇に先輩無ければ、原稿を紹介して貰ふよしもなく、大家の序文、推薦状などは更に思ひも寄らず、ひたすら編輯者の採擇をたよりに推敲しては書き、書きては推敲し、字體も丁寧、一字消しては撰者の思はくを考へ、二字入れては編輯者の心をかね、さて思ひ切つてポストに入れるまでの苦心、なかなか投書家ならぬ諸先生の思ひ及ぶ可くもあらぬ事ぞかし。

學校を卒業したる人は羨しきかな。身親しく専門の大家、諸先生の指導をうけ、なか／＼投書家にもあるまじき生硬の文章も、幼稚なる思想も、文壇一流の名家が心づけの紹介といへば、編輯者はひたすらに恐入りに没書にはせじ、好き境遇につれて、赤門さては早稻田と、直ぐ樂屋入

りの出来る青年は羨しきかな、文學に志す者なべてかくこそありたけれ。

文壇のことは暫くおき、哲學、自然科學などの大家諸先生に就て見るに、其著書大かたは晦澁にして容易に了解し得べくもあらず、會々辛うじて解し得るものと雖、文章の粗造にして生硬なる、死灰淡水も雷ならず、到底興味を以て讀むに堪ゆ可からず。人間は其言はんとし、語らんとする内容のみ多くなりては、文章の推敲、洗練などはなかくに出来ぬもの也、出来ざるにあらず其餘地なき也。表白の技術と、表白せんとする内容とよく平均したる時、人は初めて文章の推敲、洗練に意を致すことを得べきなり。大家の文章の空疎、晦澁に失するは云はんとする内容のみ多くして、表白の技能之に伴はざるが爲也。今の博士學士といふもの、大かたは盲啞學校の卒業生と擇ばず、學校教育の缺點窺ふべき也。

學校出身の文士稍々之に類似す。

人間は就學年齢までには何事にもあれ一通り言語し得るまでに發達して學校に入りて知識を修得し行くもの也。口をきく事の出来ぬうちに、學問は無理の事也。文章の道も亦此の如し。文學専門の學校を卒業したればとて、思ふやうに筆の廻るものにあらず、それまでに一通り何事にもあれ、言はんとする事は書き流し得るだけの素養なかる可からず。

文章の修養には順序あり、『汽笛一聲新橋を發し』歸つて燈下に此記を作る』作文の稽古より始めて、漸次に組みたて行き、思想の發達につれて、論文小説など複雑なる文字に及ぶべし、かく順序を追ふたる文章の修養を怠り、學校を卒業したればとて、急に複雑なる文章の書けやう譯はなし、かりに數年苦しみて己の書くものは何うやら人にも讀まれるやうになりたればとて、此種の人に限り、論文は書けても叙事は出來ず、

美文は出来ても論文は書けずといふ畸形的文章家多し。文章といふものもと左様の性質のものにてはなし、順序を追ふて修養したらんには、硬軟雅俗、意のまゝに成る可き也。學校出身の文士に此弊多きは、何處かに無理ある徴と知る可し。殊に賣り出されの新進作家とも云はるゝ人に著しき田舎訛の其まゝなるは、少くとも文章に苦勞の足らぬ證據といはれても返す語なかるべし。

此點に於て没書の苦勞を嘗め盡したる作家の自然の順序を追ふて練磨されたる文章は見るからに心地よし。赤門、早稻田の出身を除きて文壇に旗幟を樹つる諸作家、恐らくは皆投書家の苦勞に思ひやりのある人なるべし。風葉、藤村、葵山、秋聲、花袋を始めとして諸家の文章皆練磨、苦心の跡、歴々たるを見る。われらは文章を愛す、故に其苦心の跡明かなる文字に接する毎に深き尊敬の念を以て之を見ざる事なし。

頃者、機會ありて年少投書家諸君の原稿を見るに、其生硬未熟はもとよりとするも、記者は今の投書家諸君が、あまりに大膽なるに驚けり、あまりに文章に不忠實なるに驚けり、記者が小學校に在る時、今の小説家春雨は同じ名にて中學世界の一投書家なりき。記者は當時春雨が書きたる懸賞小説を愛讀したり、後記者は中學に入りて始めて文章を綴り之を青年雜誌に投書したり。されど非才多くは没書の非運に遇ひて無念やるによしなかりき。當時記者の知れる二三の先進投書家が數年の間に一躍して、今は大家の列に入りたるに、記者は猶依然として文壇の投書家也、まさに慚死すべきにあらずや。されど、當時記者はその未熟なる文章に猶記者の全力を傾注したり、幾度か推敲し、幾度か洗練し、稿を改むる事數回にして之をポストに投じたり。記者は夢にも書きなぐり書き散しなごいふ事を知らざりき。之を以て見るも文壇に一家をなす諸先生の苦

心は想察に餘りあるにあらずや。
好き地位にある人々は或は輕蔑の意味を以て『投書家』を呼ぶべし、されど、諸君は文壇の武者修業也、大成したる曉には槍一筋の武士にして、肩身の廣きこと決してかの氣むつかしき主君の鼻息に、小心翼々たるもの、比に非ざるべし。努むべきかな。

荒 涼

小 劍

寒夜燈を挑げて、秋水贈る所のクロホトキン翁實傳を讀み、彼れが幾十年の生活の荒涼たるに泣けり。涙を拭ふて、冷え渡りたる手な火桶に懸せば、灰白く炭班らにして、火は豆の如し。息吹きかけてこれを煽げば、机も本も灰たらし、秋を探りて、秋葉の間より飄煎餅の破片を摘み出し、塵埃を拂ふてこれを喰う。あゝ予は飢えたるなり。荒涼の趣味自らこの間より生ず。予は荒涼の趣味を愛す。

目黒の秋夕

秋雨ほろ／＼と淋しき朝、住みなれし駒込の地に別れ、居を目黒行人坂の畔に移してより四日、夕ぐれ汽車にて目白より歸る、獨り、車窓に依りて、たそがれ行く野すらを眺むるに、戸塚、大久保、新宿のほとり、曾て友と手をとり、袖をつらねて、青春の血のおどるにまかせて、矯激なる思想を語り、理想の影に憧れてさまよひたりし處、思ひ出の、森や、岡や、みな深き印象の中にある、あはれきのふありと見し光明消えて跡なく、眞理の門を秘めかくしたる鍵は、はかなき一塊の土くれなりけり。今、妄執の夢さめなんとせる我眼に、映じ來る秋夕の天啓、金色の返照に、尾花繚れて白き、『臨終の平原』に對し、さても想ひ出多き我身哉。中心、無限の寂寞にうたれて、寓に歸るに、友、桂木頼千代逝くと、

一片の悲報、机上に横はりて、我紅涙一滴のあとげにかりそめの夢にあ
らざりけり。

灯をかゝげて、靜かに幽冥遠き君を想ふ、噫已往六年に亘り、君が東
京孤兒院幹事と名のり、枯骨さむむき病軀を挺して、無告の孤兒にさゝげ
たる犠牲は、さらぬだに、かよはき君が心身を消耗して、其末期を早か
らしめたるか、廿八年の春秋、曾て一日も放心して嬉むなかりし我友よ
さても倅うすく、運命つたなかりける君が生涯かな。

されど君、噫されど君、君がよく我利の妄執を脱し、あらゆる肉の慾
求と衝動とに克ち得て、迷多かるべき青春の日をささげて、瑩々たる四
十餘人の孤兒に盡したる短かき生涯は、之實に大なる感謝、そのものに
あらずや、聖き祈禱そのものにあらずして何ぞや、曾て君と慈善の事を
談論するや、余は之を社會改良、社會救済の事業として、其結果を批評

し、客觀的價値を檢査して、大に慈善事業の矛盾と、姑息と、弊害とに
及べり、されど之れ恐るべき余が迷妄なりき、慈善は、客觀的に其の効
果を評價する、が如き性質のものに非ず、慈善は、初めよりある目的の爲
にせんとする、理性的、推論的のことにあらずして、中心の同情が流露
して表はれたる、非理性的のこととなり、路傍に哭ける老ひたる蹙者の見
る目いたましく、我中心の哀情にうたれて救ひたるが、折からの雨に、
あはれ頑丈なる一人前の男になりて、一目散にかけ出したりとて、其人
の主觀の哀情は、欺く蹙足の惡徳を擧げ來りて論ふべき問題と全く其野
を異にせる也。

友桂木君が短かき生涯は、光明の歴史なりけるかな。かくて余は君の
けだかき面影の髣髴としてせまるを覺ゆると共に慚恨の感涙うたせき
あえず、曾て枯川君と、憐れなる勞働者より托されたる孤兒を君にはかり

ぬ、吹きすざぶ筑波風にしぐれそぼ降る青山の原をたざりて君と語りたる時。千條の柳煙る都の春を眼下にして、日比谷北門に巍然たる審庭の樓上より、電氣と蒸氣との文明を批評したる時、噫ふたりのえにしも又淺からざりけるなり、煩悶は我慾の反影なり、人、隣人の爲に、生を此世にうく、何を苦しみ、何を悶ゆるの餘地あらんや、我は居を更むると共にさらに新しき生涯に入らざる可からず、友のおごそかなる死の我れに與ふる啓示のいかに大いなることよ、我はひれ伏して君が幽冥の靈に謝しぬ。いで夕月の影さやかなる稲田の細道をたざるに、桐ヶ谷のほとり、松杉のくまざりあやしきに、人焼く煙、一空に搖曳して、しめやかなる平原の夜氣を破る水車の響いとかすかなり。あはれ、あるかなきかの我心かな、『墓碑の輓歌』は幽かに唇にふるひて目黒川の葦の葉すれにかよひぬ。(三八、一二月)

肉情細叙の傾向

文壇は竟に、作者の『全自己』を窺ふに足る可き創作を要求するに至れり。危機、恐怖、秘密といふが如き、凡て結構、條理の興味を中心として、創作の動機を讀者の享樂にのみに置きたる所謂冒險小説、探偵小説の類が、文壇的價値を失ふてより、舊硯友社派の小説は、『藝術の爲の藝術』てふ呼聲と相俟ちて世に行はるゝに至れり。されど彼等の作者は到底『全自己』の聲にあらざりき、『眞實』の聲にあらざりき、見よ各自が其實際生活に於ける經驗の眞摯なる反省より來る、抑制し難き表面的衝動を吾人は彼等の作の何處にも認る事能はざりき、彼等の作には力なし、彼等の作には生命なし、彼等は人間の生活を描きたり。されど其は生活の外形にして生活の内容にあらざりき。彼等は戀愛を描きたり、されど其

は戀愛の模型に過ぎずして、戀愛の實質に非ざりき。

たとへば一度青春の戀を失ひたる青年が執拗、徒に永き一生を飄零の中に送るといふが如き、小説の結構、條理として見るときはもとより興味あるべきも、之を日常生活の經驗に照して、人情のまことより見るべきは、其あまりに夢幻的にして、あまりに虚妄の甚しきに驚かずんばある可からず。此の如くにして舊硯友社派の作家は多く戀愛を描き、情事を描寫せり、されど其戀愛や、其情事や、之を要するに結構中心の戀愛なりき、條理中心の情事なりき、純藝術の聲は高かりしも、實際に於て彼等の作は冒險小説、探偵小説が新裝して現はれ來りたるのみ、讀者の享樂を創作唯一の動機としたる點に於て、兩者毫も擇ぶ所なかりし也。

過渡社會の動搖時代は漸くにして去り、科學的教育の普及に伴ふて、沈靜なる新時代は來り、動搖の時代は情熱の時代なり、沈靜の時代は理

智の時代なり、而して理智の時代は意識、自覺、反省、批判、沈思、瞑想の時代なり、讀者は今や虚誕なる結構、荒唐なる條理の前に自我を忘れて恍惚たる事能はず。彼等は一層切實なる自白の聲を聞かんとせり、彼等は一層深刻なる眞實の聲を聞かんとせり。曰く『星莖文學』之理智に勝れたる讀者が舊硯友社一派の創作を葬りたる最後の輓歌なりける也。

理智に蔽はれたる時代の『眞實』に對する要求は、竟に實寫主義を標榜する作家を生めり、茲に於て舊來の夢幼小説に慣れたる讀者と、頑陋なる道學者とは相和して淫靡文字の惡稱の下に所謂實寫小説を批難するに至れり、されど今にして當時淫猥なる小説の代表作として目されたる二三の小説を通讀するに、吾人は毫も之を舉げて淫靡讀むに堪えずといふが如き批難を下すに足る可き箇處あるを認めず、而も世評徒らに喧囂、甚しきは青年學生の風紀問題を一に此種の實寫小説に歸せんとする者す

らあるに至れり。

現今の自然主義は實寫主義の好き意味に解釋されたるものにして、亦實寫主義の一種たることを失はず、作者は徒らに讀者の享樂を標準として、結構、條理にのみ重きを置くの結果、人情のまことに觸れて流露し來る、活潑々たる創作的衝動を損傷せられ、其創作の中に『全自己』を傾注すること能はざるを恐るゝに至れり。路傍に咲き繚れて、童の踏むにまかせたる名無し小草の花も、手にとりて仔細に之を觀る時は、驚くべき自然の美と、驚くべき天然の妙工と同じく其中に備はりて缺くる所なきが如く、人間日常生活の茶飯事にも深遠なる人生の意義は默示されたり。短篇の流行は此の如くにして來れり、無結構の藝術は此の如くにして來れり。之を要するに自然主義が實寫主義の名に代りたるは、人生の『眞實』を知らんとする時代の要求に應じたるもの也。然り生活の内容を

反省し、批評せんとする、理智の時代の要求に應じたるもの也。

頃者文壇の一部に肉情、衝動の細叙に力を致さんとする顯著なる傾向あり、微を穿ち、緻を極めて肉慾、衝動の過程を細叙し來る所、曾て淫靡文學の代表として世間に喧傳せられたる二三の所謂寫實小説の比にあらず、當時かの寫實小説家の描く所を目して淫猥の極と思惟したる一部の論客、教育者たるもの此傾向に接して奈何の顔色かある、良妻賢母主義を標榜する教育者、論客は結婚の事實を認めざる可からず、結婚の事實を認むる彼等は、戀愛の事實を認めざる可からず、戀愛の事實を認むる彼等は戀愛の内容を認めざる可からず。頑陋なる一部の論者が寫實小説の非を鳴らしつゝありし間に、文壇の風潮は急轉直下して、今や肉情細叙の傾向に走らんとす。

勿論、今日世に行はるゝ小品の中には、或は不健全なる動機になれる

ものも少からざるべし。されど、吾人は此驚くべき傾向の中に、なほ人生の『眞實』を要求し、生活の内容に觸れんとする眞摯なる時代の聲を聞き得る也。今は之約束されたる『現代生活の一大自白』を實現せんとする文壇試験の時にあらずや。

荒 涼

小 劍

同勢十八人にて銀座の牛肉店に飯を喰う。一時に多くの注文は、マのお代り間に合はずして、鍋は空なり。汁は乾きて、葱の端と豆腐の片は黒く焦げたり。たま／＼電燈を悪く減して、四邊暗黒、窓から子より差込む星明りに漸く對座の人の顔を物色するのみ。『ドリも濟ません』と、女中は麥酒の空瓶に蠟燭を立て火を點じて持ち来る。此處にもまた荒涼の趣味あり。

(五)

冬の夜、秀湖とてんぶらに飽食し、膨れたる胃を撫でつゝ、相並んで日黒川の畔に立つ。刺すが如き寒風は肌を迫りて長く居るべからず。秀湖曰く「小便をしようちや無いか」と、忽ちにして、尿の水に落つる音響々たり。荒涼の美は、こゝにもあり。

繪 姿

あはれ、雪よりも白き大理石に刻みなされたる、希臘裸體美人の立像に對するに、先づ身に逼るものは、名にのみ聞きし名匠の、鑿の香のそれのみに非ず、玉を伸べたる筋肉、天使と擬ふ容貌、實に其藝術の影にかくれたる『善』と『美』との一致てふ希臘民族の理想也。解放されたる婦人の面影也。

老嬢バプチヌチンはユーゴーの『哀史』に現はるゝ『聖女』にして、終生嫁がず、あらゆる現世の快樂を捨て、惱めるもの、苦しめるものゝ爲に一生を犠牲に供したり。今其姿をさる名工の筆に見るに、慈愛あふるゝ老眼、堅く結んで思慮ありげの唇、そゞろ人なつかしき面影也、されど紅あせ、肉落ち、枯槁憔悴の状いと哀れ也。

十九世紀は虚偽の時代なりけるかな、『聖女』てふ美しき名の下に、女性之美を害ふて茲に至らしめたる也。彼をこれと思ひ比べて、いかに感慨深からずや。

思 ふ

「云ふ」の自由は無くとも、「思ふ」の自由は誰れにもある。我輩は常に、口にしたたり、筆にしたたりしては、叱られるを「思ふ」ことは、たゞ「思ふ」だけにさめて置く。若し「思ふ」人が一人殖え、二人殖えて行くこと、たとへ一行の文章が無くとも、半言隻句の演説が無くとも、世の中に勢力を作ることが出来ると「思ふ」。

クリストは「思ふ」たゞけでも姦淫罪は成立すると云つた。しかしどんなセザリズムの國へ行つても、「思ふ」たゞけで、其の人を捕へる役人は居ない。我輩はこの點に於いて、科學の進歩のなほ未だ幼稚なるを感ずるものである。若し科學が進歩して、X光線のやうに、人の「思ふ」して居ることを自由に寫し出す器械が出来たら、それこそ大變、上下の衝突は絶え間無く、家庭の波瀾なぞも至る所に起るであらう。我輩は若しこんな器械が出来たら、先づ第一番に教會の壇上に立つ人を寫して見たいと思ふ。世俗の葬式と云ふもの、席上に、この器械を据えて置いたら、會葬者の數が少いことであらう。他家へ行つて、堅い牛肉を喰はせられて、「ドゥも結構で」なぞこやつて居る後から、この器械をつきつけたら面白いことであらう。(小劍)

歲 晚 私 信 (一)

西川兄足下

いかに感慨多き歳の暮には候はずや。今日は土曜にて、杖を南郊の枯野に曳き、灰色の霧低くこめて、午後の日かげ幽かなる平原の大氣の中に回顧と想像と、慚恨と希望と、身はいつしか恍惚の谷に落ち行きて、悲哀と歡樂とのいとく微妙なる境を縫ふて逍遙いたし候。

われ等はかの哲學者や、宗教家の如く觀念界の事などには曾て想ひ至らざる匹夫野郎に候へ共、現在の人間らしき生活を抛ち、師にそむき、友に離れ、骨肉共に語らざる日常生活の苦悶は、虚弱小生の如きを鞭撻して日にく眞面目ならしむるよう覺え候。精神生活の上に於ける苦悶は實際生活の上に於ける煩惱より遙かに高尚なるもの、様に思ふは教會

の諸君子一般の傾向に候へ共、われ等はかゝる考へに對して一向に同情無之ものに候。

足下、余は基督教會に對しては随分亂暴を働くものに候へ共、個人の信仰、則ち宗教其のものに對しては、妄りに驕慢の矢を放つ事なし、恩師倉永巍先生の如き、猶狂暴僕の如きを捨てず、僕と會して慈愛昔日の如し、余は純然たる基督教的信仰の模範を、倉永巍先生に見候。足下余はベンヂヤミン、キツドにはあまり感心致さず候。況んや似て非なる幾多のキツドをや、余は教會に毒矢を放つと共にボールの『バムカルの思想』に費す時間を惜まざるものに候。

人類の手によりにて最も古くなされたる大戯曲は『ヨブ記』かと存候。小生は今も昔もヨブの悲壯なる煩悶を讀みて多大の感興を覺ゆる者に候。されど小生はまたツルゲネフの短篇『濕野のレアー』を愛讀致し候。ヨブ

は信仰の情火胸に燃ゆるユヂヤの聖人也、レアーは沼臭き身はづかしき濕野の農夫也。ヨブの苦悶は神の試練に對する努力也。レアーの煩悶は日常生活の上に於ける卑近の事也。されど小生はヨブの苦悶とレアーの煩悶との間に深き意義の連續を認むるものに有之候。

足下『改革者の心情』の發賣禁止は實に遺憾千萬の事に存候。『改革者の心情』は足下が日常生活の間に於ける苦悶の忌憚なき自白として、近來の最も偽りなき著述と存候。よくも卒直にアノようなる自白をなされしものかな。足下は眞に時代の人也、然り無意識的に『近代精神』に動かされつゝある時代の人に候。

足下『凡人主義』といふ字は恐らく足下と孤劍と小生と三人の造語と確信致し候。よし假りに以前に用ゐられたる事ありとするも、三人が之を用ゐたるは少くとも自發的に出でたりと明言して憚らず候。小生が初

めて火鞭の論文に『凡人生義』といふ題を附したりし際、友人宮田暢氏は小生に忠告して、『君の文章は由來難解の批難多し、凡人主義といふが如き新造語を用ふるは甚だ穩當ならず』と小生も一應尤もの事と存じ、『わが徒の人道觀』と改題致し候。其後小生が土佐に滞在中の秋水兄に送るたる私信の中にも英雄主義に對し、凡人主義といふものを組織的に述べて見たし等申せし事を記憶致し候。

友人中里介山君はトルストイの理性的基督教を信ずるの人、其眞摯、熱烈なる何人も及ぶべくもあらず候。殊に才學文章到底吾人の比に非ず、されど君がニーチエ、カーライルの英雄主義とトルストイの思想とを一致せしむる點だけは小生の未だ首肯し能はざる所、トルストイの大作『戰爭と平和』に於けるナポレオン一世の陣營生活の精神的描寫は伯の『偉大なる凡人主義』の表白にて、伯の著『セバストポール』及『戰爭と平

和』に現はれたる戰爭觀は、儘かに人間の團體運動の心理を説明したる凡人主義の表白と存候。

ナポレオン一世が一兵卒と共に恐怖し戰慄し、聖母マリアの腫に人間の母の慈愛が浮び出でたるが如き近世藝術の特點と存じ候。

先日も山の手線の汽車にて山路愛山氏と同乗致し候。氏は吾人青年を見ること恰も嚴父の兒に對するが如く、常に嚴格なる叱責と、眞摯なる忠告とを加へらる所眞に感謝に言葉なし、氏は其時青年が徒らに社會主義者に煽動せられて、非常に悲惨の境遇に陥るを慨嘆せられ候。之に對しては小生共只恐入るの外なし、さりながら今は古き社會の習慣制度漸く頽れて、新しき習慣制度未だ起らざる、道德の過渡時代と存候。換言すれば時代の變遷と共に、今は新しき人間の生命の發展が、古き時代の習慣制度に適應せず茲に一場の衝突を來したる時代也。或種の個人性を有す

る一部の青年はかるゝ時代に於ては必ず極端に反抗して、悲慘の生涯を送り時代變遷の犠牲となる、これは殆ど免る可からざる人間社會の運命と存候。

されば世に極端なる社會主義なしとするも、或る少數の青年は何等かの道を以て、社會の固定的習慣制度を破壊せんとし、壕の埋め草となる、困つた輩と存候。

之は歴史家たる愛山氏の元より百も二百も承知せらるゝ所にして、ド―セ仕方のなき奴等とは知りながら猶此言ある所が、氏の何處までも眞摯なる人格を表するものと存候。

散歩より歸り燭を剪つて此稿を草し候。目黒は今宵静かなる月の光にて水車の音のみ冴え居り申候。 (十一月廿四日)

歲 晚 私 信 (二)

親愛なる西川兄足下

僕昨今エンリコ・マラテスタの著書翻譯中に御座候。遠からず脱稿の筈に御座候。マラテスタの英譯は、足下も御承知の通り随分平易の文章に有之候へ共、イザ翻譯となれば、猶多少の面倒を感ず、何時まで經つても原書の讀めぬには閉口の外なく候。

西川兄足下、十一月下旬の事に候、小生は、郊外の某停車場に急がんが爲め、線路に沿ふて靜謐なる初冬の枯野を行きたる事有之候。構内に稍遠きシグナルの下にて小生はフトしたるはづみより二人の保線工夫と語を交へ申候。小生は野狐の毛皮の如く色づきたる淺茅を藉き、工夫は鐵棒を杖にして突立ちたるまゝ小生に對し候。落日の光は小生の肩をす

べりて、頑丈、岩の如き工夫の筋肉を赭く照し申候。
彼等は烈火の如く激して、舊日鐵重役に欺かれたりと號叫し、此怨恨は如何で讐みんと憤慨致し候。彼等は其當時連夜引續き自ら淺草に演說會を開催したる由に御座候。其時小生も手荷物を抛ちて、一場の野外演說を試み申候。

此騒動のしかく盛なりしに係らず、都下の新聞紙が、毫も之に關して記載する所なかりしは、奇怪の事と存候。

「ワツチ共はもう、今時の新聞屋なんかを相手にしては居りません」之工夫の口より漏れたる自覺の聲に候。之實に驚くべく、また恐るべき聲には候はずや、今や労働者も日本の『名士』諸君を瓦礫の如く棄てたり、「ワツチ共はもう、今時の新聞屋なんかを相手にしては居りません」何たる痛快の弾効に候ぞ。

先頃の『衆愚の跋扈』は面白く拜見致し候。民主々義に對する批難として、英國等にも既に久しき以前より此聲あり、小生豫め『新佛敎』紙上にて文相の訓令を評したる中に其事を論じ置きたるに、果然近來讀賣子の口より此聲を聞くに至りたるは、豫期したる事とは云へ、多少の議論を戦はずの止むを得ざるに立至るべきかと存候。

『社會改良』といふ事は上流社會に高尚、清新なる趣味を與ふる事より初まるもの、由にて、近頃穩健なる『名士』諸君は頻りに演劇會などを設立して、貴族、資本家の夫人令嬢などに觀覽を勧誘致居候。處が其勧誘の方法は頗る巧妙を極めたるものにして、近頃は思ひがけなき御方様が『藝術』がどうしたの、『文學』がどうしたのといふ高尚な雑誌などを押賣せられて居る様子、何とも恐縮の至りに候。

一例を申せば、さる貴夫人は『いろは』も讀めず、別莊へ行く汽車の中

にて、御自分の眼の前にペンキ塗へ平假名にて立派に驛名を書き現はしたるを知らねば、お供の家扶に『此處は何といふ處だつたねへ』など、仰せあり、お供も一等室の乗合の手前、時々冷汗をかくといふ御方なるに、近頃誰から勧誘されたものか、文士演劇等に熱心にて、何とかいふ六つかしき雑誌も御購求なさるゝ由、此分にては、貧富の感情も遠からずして調和され、極端なる社會主義者等は跡を絶つに至る可しと存候。

足下、曾て、小劍兄を訪れし事ありや、足下、枯川兄及小生と同じく、長大肥満の人なれど、色の白きだけが目立ち申候。澁谷の新宅は鐵道線路を去る約二丁ばかり、其間は稻田にて障害物なく、車窓よりハンケチを振れば相呼應する事を得申候。

足下、孤劍は稍快方に趣き候様子、小生は孤劍の爲切に郊外生活を勧め申候。本郷森川町、四谷傳馬町、牛込神樂坂は到底人類の生活し得べき

處に非ず候。

小生は相變らずさみしき夕の車窓によりて物思ふ事せつに候。野葡萄と、櫛としくれて寒き冬枯の野に、渦く石炭の煙を見つめてツルゲチフの『煙』の主人公の如く、『噫 塵よ、煙よ……』と重き吐息に暮るゝ事屢々に候。

足下、此樂しき悲哀を知り給へりや。

(十二月五日夜)

郊外より同志に

其一

▲エマルソンに就て

民心の活機暗中に動きて、革命の生氣山河に鬱勃たるが如く、郊外には早くも秋の景色ほの見えて、露重き朝の雲、夕日に鳴く法師蟬、立秋の徴は野にも岡にも充分と相成り申し候

友、孤劍獄中に在りてエマルソンを愛讀し大に其所説に心酔いたし居り候由、小生は孤劍の人となりと、エマルソンの思想とを比較して多大の趣味を感じ申し候。本来ならば薄識淺才の小生などがエマルソンを云々致し候は些か心差し次第に候へ共、孤劍の手書に接して感興を、るに候ま、断片的の智識を綴り合せて少しくエマルソンを論じて見たく相

成り候。

エマルソンを論ずる事の困難なるは彼の思想の高遠玄妙なるが故に非ず、彼の文字のあまりに奇警晦澁に失するものあるが爲讀書力の淺少なる小生ごもにとりては其書を解する事だけに非常の困難を覺ゆるが故に候。想ふにエマルソンの思想は今日より見るときは、左して驚くべき程のものに非ず、殊に十九世紀後半の思想家に比べては、其説のあまりに散漫に失し、あまりに非科學的なる點に於て、思想家といふよりも、寧ろ詩人といふの當れるを覺え候。

察するに孤劍がエマルソンに感じたるは其思想よりも寧ろ其文章の奇警なるに失魂し、同氣相投じて深く彼の所説に歸依したるに非ざるかと存じ候。

孤劍は由來天才肌の男にて、其觀察の銳利なる點に於て、其文章の痛

切なる點に於て小さきエマルソンの面影あり、エマルソンの想像力は如何にも鋭敏にして、其文字は如何にも奇警なり、今試みに彼が詩人ゲテを論じたる文章の一節を摘譯せんか、

「自然は默示也、萬物は皆自己の歴史を盡かんす、遊星、隕石は其影を曳きて疾走し、轉岩は山腹に其搔傷を残し、河流は地上に溝梁を穿ち、動物は地層に其骨骸を止め、巖、木葉は石炭に其碑銘を印す。

眞にエマルソンの文章は其バラグラフ皆銳利にして威嚴ある一個の金言と見るべく恰も珊瑚樹の斷片の如し、其比喻の大膽なる其文辭の雄渾なる、此の如き系統の文章を作すもの之を我が同志間に求むれば只山口孤劍其人あるのみ。孤劍とエマルソンとを比較するといふにはあらねど、其文章の系統の同一なりといふ點に於ては、平素孤劍の文章に親炙せる同志の、何人と雖否む能はざる所と存じ候。孤劍が曾て十九世紀の文明を罵倒して、

「文明の大怪物は其大迷宮を建築せんが爲に、右手に鑿を執り、鉋を提げて起り、而も左手なる槌を揮ひ、斧を動かして、あらゆる宇宙の善と美とを破壊するを厭はず、電線は空を編み鐵軌は地を織り、鐵山は到る處に開鑿せらる、水道は到る處に流通され、自然は其美しき姿を傷はれ、村落は到る處其平和の光を失ひしに非ずや、而して彼の愛子なる黄金てふ驕童は、情あるものを蛇の如く殘忍ならしめ、慧き者を狼とし、愚なるものを驢馬となし、たゞ此驕童の寵を得んが爲にエテンの花園の如き美はしき人の心は、フランテンブルグの黒沙漠の如く荒れすさびて、街を往きかふ男も女も、色あせ眉ひそみ、眼には窃盜の如き光あり。

其比喻の大膽なる、其措辭の奔放なる、實に孤劍の文章にはエマルソンの面影充分なり、孤劍が獄中エマルソンの文章を讀み恍惚として心酔し、百年の先輩に接したるが如く思ひ做したりといふ、眞に無理ならぬ事にて、左こそどうなづかれ申候。

されどエマルソンは社會主義者といふよりも、寧ろ個人主義者にて、無政府主義の議論とは往々にして、一致する個處あるも、社會主義の所説には相反する所多し、要之、エマルソンの思想に統一なく散漫にして非

科學的なる處は何處までもロマンチックにて十九世紀前半の特點を露して餘す所なきものと存じ候。

尙次便にて社會主義とエマルソンの思想とを比較論評し、引て孤劍の思想に及ぶつもりに候。本便は只エマルソンの文章論だけにとゞめ置き申し候。

其二

▲エマルソンに就て (つゞき)

雨けさも歌まらず候、折角建仁寺垣を越さんとしたるコスモスも、一夜のあらしに残りなく無慘に繚れ伏して、牽牛花の鉢の庭たすみに倒れたるなど、すべて狼籍のさま、野分の朝のけしき、革命騷擾の跡にもたとへ申すべきや。面白くながめ入り候。

エマルソンの文章に就ては大畧ながら前便に申し上げたれば、本便に

は彼の思想に就て一言申し述べたく存じ候。

凡て十九世紀前半の思想家の頭腦には、互に矛盾せる二個の思想を含み居り候、即ち社會主義(人文主義)と、個人主義とは何等の消化作用も加へられず、個々別々に其頭腦の中に詰め込まれ居り候、抑も十九世紀の初期は歐洲の天地未だ革命の動亂時代にて、只反抗、只情熱、只破壊、只詩歌といふ有様にて、毫も科學的研究の途開けず各人とも情熱にまかせて直覺的に、大膽奔放の説をやりたる時代なれば、如何なる大思想家の説と雖、之を今日より見るときは矛盾撞着四離滅裂を極めたるは言ふまでも無き事と存じ候。

革新の始にして終なりと稱せらるゝルソーは或る意味に於て十九世紀思想界の祖師に候。此人の思想の中に存じたる二個の矛盾せる思想は社會主義と個人主義とに候。ルソーが議會政治を主張し、憲法要求の

第一聲を擧げたる所に徴すれば、彼は明に民主主義者にして、社會大多數の感情を一貫して流るゝヒューマニチーの上に基礎を置きたる人に候。此點に於て彼の思想には充分社會主義の分子を含み居るものと申すべく候。然るにルーソーの教育意見として有名なる『エミール』によれば、彼は極端なる個人主義者にて、多數の壓制の下に個人性を犠牲にすべからず、兒童の發育は絶對的に社會の感化、制度定規の壓制より脱し、家庭に於て孤獨に其天性を啓發し行かざる可からずといふ點は彼の固持して動かざる所に候。元より此兩說の間に調和すべき餘地なきに非ず、また、ルーソーは天才なれば一言もなく之を解釋し居りたるやも計り難く候へども、少くともルーソーが一語の説明もなくして、二個の矛盾せる思想を持し居たりし事は争ふ可らざる事實に候。

エマルソンはもとよりルーソーの強き影響を受けたる人にて、彼はル

ーソーの矛盾をとりて其まゝ之を稱道したるやの觀これ有り候。最も甚しき一例を擧ぐればエマルソンが哲學者としてのプラトーンを論じたる文章には同じ頁の間に水火相容れざる矛盾を含み居り候、彼は個人主義、英雄崇拜主義の立場よりプラトーンを見て、

凡て其時代に卓絶したる偉人に就て屢々起り來る疑問は何れが其人の眞の著作なるかといふ事に在り、ホーマー、プラトーン、ラファエル、シエークスピアの諸家の著作に於て皆此例を見る、されど後世に於て此の如き疑問の起る所以は、これ偉人が常に同時代の民衆を感化し、類化するが故にして、時代の凡衆が決して自己一人にて爲し得ざる所を、偉人は同時に身を數體に化して活躍し、無數の手を以つて或は之を書き、或は之を描き、或は之を行ふ、されば若干時の後、孰れが彼の眞の著作にして、孰れが其門弟の筆に成れるものなるかといふが如き疑問を生ずるに至る。

此の如くにしてエマルソンは英雄、偉人が其時代と社會とを同化し、類化し得るものとなし、個人の方を非常に過重したるに係らず、次の節に於て全く之と相矛盾せる説を吐きたるは、如何に天才の文章とは云へ

あまりに晒ふに堪えたる事と存じ候、茲に至りて、かのホームズがエマルソンを評して『容易に分離解體する脆弱質の文章』と嘲りたるも左こそと思はれ候。かくして彼は偉人プラトンは時代を造り、凡衆を類化したりと論じ、次の節に於ては翻然プラトンを以て社會の産物なりと言明して憚からず、

社會はプラトリーてふ組立人の爲に、過去に於て非常の犠牲となり來れる、無数の勞働者ある事を無視して、感謝と褒賞の余てをプラトリー一人に與へんとす、吾人がプラトリーを喝采するは、之正にソロン、ソフロン、ヒロラウスより來れるクオーテーションを喝采する……故に一代の賞讃を身に集め得たる大發明家はまさに全國民を犠牲として立ちたるもの外ならず。

此の如きは實にルソーの矛盾にして、エマルソンの矛盾、エマルソンの矛盾にして又カーライルの矛盾にこれ有り候。十九世紀の前半は革命の動亂時代なれば、エマルソンとても當時はいふまでもなく一角の民

主々義者にて、獨裁專制の政治を惡み、貴族、僧侶の横暴なる權力を呪ひたる點に於ては決して人後に墜つるものに非ず、彼は此點に於て立派なる平民主義者に候。

然れども晩年に至りては、彼大に民主主義の弊害を認め、愚民論をなして大に衆愚の跋扈を嘲笑致し居り候。

普通教育の普及と共に、あらゆる個人性の圭角を除去して、人間の平準法を行ひたる現代に於ては、俠勇ある人物缺乏して社會は徒らに俗了凡化したり。見よ、現代に於て詩人はなし、されど所謂文士は幾十人もあり。コロムブスは無し、されど手に望遠鏡と晴雨計とを携へて、忙然なす所無き船長は幾百人もあり。アモッセニスは無し、チャタムは無し、されど議事堂的辯士裁判的辯士は無数にあり。豫言者、聖人は無し、されど神學校は軒を並べたり。學者は無し、されど研究會、パンフレット、小圖書館の数は擧げて數ふ可からず。

エマルソンは教育の普及と共に偉人英雄の消滅したるが如くに説きたり、之當時にありては目先の變りたる議論にて、一時世の喝采を博したる

も、今日より見れば淺薄幼稚なる考にて、十九世紀は一般の智識が高まりたる爲、人間の懸隔消滅し、萬人の自己意識と共に其偉人に對する見解に一變化を來したりといふまでと存じ候。

猶彼がアメリカの文明を罵倒して痛快を極めたる文章を摘譯し來らんは、なか／＼に興味ある事とは存じ候へ共紙面の限りもあり、之にて筆を擱き申し候。要するに本便に於ては、彼の頭腦に英雄主義と人文主義、社會主義と個人主義とふ二個の矛盾せる思想が、少しも消化されず投げ込まれ居る事を論じたる積りに候。

小生はエマルソンの才學文章を愛すれども、思想としては、一向にとりこめなく、只珊瑚の断片として之を珍重する以上に出でず候。猶次便に於て彼のバンセイズムを論じ、此項を終る積りに御座候。

八月廿五日夜認む

其二

▲エマルソンに就いて (つゞき)

前便にはエマルソンの社會主義的思想を批評したれば、本便には彼の汎神的思想に就いて一言いたし度く候。

エマルソンはもとボストン府ユニテリアン教會の牧師にて聖壇に立つ事三年、自己の信仰と正教の神學と一致せざるものあるを見、一八三二年九月、沈痛悲壯の辯を揮ふて教會告別の演説をなし、斷然其職を辭したる人にて、此演説こそ尤も簡單に彼の信仰を窺ふべきものと存じ候。

就て見るに彼の思想は要するに、汎神論に歸着いたす可く候、人間は萬物の中に存し、萬物は皆我に備はる、天地人間の心靈は皆一に歸すべく、此一大心靈こそ宇宙の竟極原因にて自我の存在は此、天地人を通じて存する竟極原因(神)の一屬性に過ぎずと見たるやうに候。

されば人間の目的は此宇宙の心霊、竟極原因に一致するに在り、此境涯に立ちて人は始めて凡ての慾望より解脱し、たゞへば花の自ら咲き、花の自ら散り行くやうに自然に同化して安心立命の地を得べしと説き、教會、神學、信仰個條あらゆる宗教上の權威を排斥したり。之汎神論の歸結としてもとよりの事といふべく、汎神論はまことに精神的無政府主義と存じ候。

また彼が人間は其社會生活の犠牲として自由を賣るものとし、キリストは此社會生活の根底の道德たる『一致』といふ事を拒絶したるものなりと説き、之と同じ筆法を以て教會を排斥し、個人の思索は説教者の講演以上也、神學以上也、凡ての智識以上也と喝破して、頑陋なる教會的基督教を弾劾したるは、汎神論者の彼としては寧ろ當然の事と存じ候。今茲にエマルソンを汎神論者と申したるは全く小生の不注意にて、彼

は現今のロツツエやヴァントやパウルゼンの如く汎神を論じたる人にあらず、汎神を直覺したる人也、信じたる人也、されば寧ろ熱心なる汎神教者といふの適當なことを覺え候

獄中の孤劍は天性著しく汎神教的の傾向ある人にて、口を開けば天の壯嚴を語り、地の美麗を説き、かりそめの對話もいつしか其天才的なる言辭の花に彩られて何人と雖も聽者は一時恍惚の境に引き入れられ申す可く候。而も其自然に對する觀察甚だ奔放粗糲にして、趣味のロマンチックなる點はエマルソンと酷似いたし居り候。たゞへば孤劍は鋭敏なる視官、聽官、嗅管の作用を以て繊細緻密なる觀察を、平凡なる自然の上に下すことなどは出來ず、怒濤、落日、暴風、雷電、蒼穹、星斗、斷崖、絶壁、之孤劍の眼に映する自然の全體にて、尾花さみしき平凡なる野の細徑に孤獨の逍遙を樂しむなごゝいふ趣味は案外に少く候。此點小なきエ

マルソンの面影あり、孤劍は憧憬の兒也、感嘆の人也、彼が獄中エマルソンの書に接して非常の感興を覺え、思想の激變に遇ひたりといふ、小生を以て之を見れば、孤劍は寧ろ其性向の趣く所に歸したるものと存じ候。

宗教は情也、社會主義は智也、社會主義は社會組織の改造に關する純粹なる理智の提案にて如何に熱心なる社會主義と雖、之を以て人生問題の全てを解釋し得るものと思惟する人はなし、社會主義を説く人が日蓮宗を信ずるとも、汎神的基督教を信ずるとも、將た無神論を説くも其間に何の交渉もある可き理なし、何となれば宗教は各個人主觀のゴッロモチにて、たとへばスキキラヒの情の如し。小生は社會主義者としての孤劍が汎神的基督教を信ずるといふをきつて其間に毫も矛盾衝突のあるべきを見ず候。

さりながらエマルソンの思想、エマルソンの議論に心服して、之を奉ずるといふに至りては、その社會主義との折合如何なるものかと訝され申し候。小生のエマルソンに對する感想は大かた斯の如きものに候。鬼も霍亂とでも申すべきや、秋風立ち初めてより風邪の氣味にて、経過どかく涉々しからず、霏々たる秋霖のさみしきに眺入りて獄中の事ども想ひめぐらし居り候。(九月廿一日)

其 四

▲停 車 場

小著『離愁』に多く汽車の挿畫を用ゐたるより、何か意味あるやに尋ねらるゝ讀者も有之候へ共、可惜青春の日を世に背きて、苦き寂寥の中にのみ送りたる小生に、時めく歴史のあらう筈なく、たとへば女蘿の下に汚ち果つる木苺のやうに、悲哀と憂愁とは、小生が唯一の友に候ひき。

小生郊外にうつりてより、早稲田に通ふに目黒より目白まで毎日汽車の便により申し候。其頃山の手線は未だ單線にて、列車の數も少なく、各驛の停車時間長きが上に、列車の遅延甚しき爲、自然、少からざる時間を、寂しき西郊の小驛に、獨り物思ひ暮し候。二三年以來は電車の延長と共に都市も山の手の手場末に向つて膨脹するやうになり候へ共、以前此山の手線は全く忘れられたる線路にて、むさし野の黒土の臭を浴びたる近郊の農夫の外は乗客もなく、雨淋しき日などはそれも皆無なりし爲、小生は茲に靜かなる冥想の時間を得て、ベンチに倚り、玻璃の小窓にうちふし、燃ゆるが如き情熱を自然と人生とに馳せ申し候。

『離愁』に蒐めたる小品の多くは、此冥想の間になりたる即興詩にて、今にして其情熱の日を想へば、何とも知られぬ甘愁を覺え申し候。雨にさびたるベンチに尾花の伏したる、驛名のやしき角燈に瘦せたる蠅螂の

とまれる、赤きシグナルの千草の岡を抽きたる、皆微妙なる觀念の列に入りて小生にとりては戀人の面影よりもなつかしき印象にこれ有り候。『離愁』に汽車の挿畫を多く用ゐたるは之が爲にて、自我の情熾なる小生に於て、かゝる自分落ちは到底免れ能はざる所に候。

今もきのふのやうに覺え候。秋の日圖書館の窓によりてツルゲネフの『煙』を耽讀しリチキノフの戀を想ひ、イレンの面影を偲び、夕陽淡き戸塚の野をたどりて目白の停車場に出で、中野の空に沈む日を車窓にながめて、桑田熊藏氏の社會政策論、板垣退助氏の社會改良論、大隈重信氏の文藝協會を想ひ、更に之等の人によりて、かのバーデンのホテルに集まりたる露西亞の政治家其他の智識階級を連想し、改革は所詮、溫健なる空論者や、戯作者肌の文學者によりて爲されざる事を嘆じ、早稲田生活の無意味にして、數千の學生と、數十の講師のハイデルベルヒに於ける

露西亞の漫學者に似たる事に想到し、戸山が原の襟林に渦く列車の煤煙を眺めて All is but smoke and vapor とリチキノフの嘆聲を其のまゝに漏したる事も有之候ひき、噫其の夕ぐれの静かなる愁思よ、實に聊頼なきは若き日の追懷に候。

更にイレンはツルネゲフの描ける女性としては、類稀なる妖婦に候へども、日本の婦人として見る時は之尋常の摸型に過ぎず候。情を銜ひ、色を誇るは之わが處女の生命とする處にて、其頃より乗り合せたるコクエチツシユなる處女の群あり、イレンの事ども思ひ合はせて、婦人の虚飾は情を銜ふの目的に出で、情を銜ふは經濟的從屬の必然の結果なる事を偲び、經濟的破綻の既に兩性の關係にまでも及べるを嘆じたる事屢々に候ひき。

學校卒業後も衣食の爲、汽車にて銀座に通ふ事と相成り候。新橋驛は

流石に都の正門なれば、かの山の手各驛の『強半草青々』たるけしきに比べて、別天地の趣あり。往きちがふ才子、佳人の群の時めく装ひに、羞耻の情やり難く、布衣席帽の身かねて電燈ほの暗き所に佇む者はこれもと昔の愁人に候はずや。

此停車場に因縁深き小生はかの驛夫の生活に少からざる同情を寄せて近頃『驛夫日記』と題する小説に筆を染め申し候。『新小説』にて掲載を快諾せられ候間其内諸君の御一讀を煩はす事と相成り申すべく候。寂しき驛夫の心に聊か苦心を致したる積りにこれ有り候。本便は停車場の隨筆と致し、之にて擲筆仕り候。(十月一日)

其 五

臨終の握手

去七月三十日 友人宮田暢君を通じて小生に臨終の面會を申し込まれ

たる未見の知己あり、牛込赤城下の石橋とのみ當時小生は未だ其何人なるかを知らざりしが、病篤くして小生に臨終の面談を申し込まれたるより察すれば少くとも文字の上にて小生を知り呉るゝ親朋たる可きを思ひ其夜直に同君訪問の事を決心いたし候。

七月三十一日は小生の愛弟痔瘻手術の爲京橋の加藤病院に在り、余は彼が肉身の兄として手術臺に立ち會ふ可き義務ありしが、骨肉の愛も知己の義には代へ難くと存じ早朝目黒を出でて品川に出で江戸川まで電車に乗り、正午の燉くが如き炎暑ををかして赤城下の交番に至り石橋といひて相尋ね申し候處、查公は言下に所在を示し呉れ候、查公が石橋氏の寓居を知りたりしは、氏が社會主義者なりしが故と後に思ひ合はされ申し候。

查公の示し呉れたる露路に入り、頻りに石橋といふ表札を尋ね候ひし

が一向に見あたらす、汗と塵とにまみれて二三軒聞き合せ居り候處へ、とある裏木戸より、風骨いやしからず鼻下に美髯を蓄へたる一人の青年出で來り、石橋君の寓居は此處なりといひて小生の氏名を尋ねらるゝに、刺を通じて來意を述べ候處、恰も待ちまうけられしが如く直ちに石橋君の病床に導かれ候。此青年こそ石橋君の親朋大久保某君なることを後に承知いたし候。

床上なる石橋君は紅褪せ、肉落ち憔悴枯稿して見る影もなく、靜かに眼を閉ぢたるが氷囊をあてたる胸に、微かなる心臓の鼓動を見せて、肋骨のいたましままでに現れたる胸部を露に横臥いたされ候。大久保君が小生の來訪を囁き告ぐるや、石橋君は突如として双眸を張り、枕をもたげんと致され候。

余は石橋君の病苦の甚だ安からざるを知り一語をも交すことなくして

只熱心なる握手を交はしたり。忽然として眼を張りたる石橋君の瞳の、あまりに冴えて、あまりに生々たりしに驚きたる小生は此衰弱したる體軀に如何にしてかばかりの力あるかを訝み申し候。君の曙光に接し君と握手したる小生は一瞬にして君の生命の全體に接したるが如く、文章を以て社會に報ゆる小生としては私かに此知己ありし事を誇とせざるを得ざりしだけ、平素強健の日に於て君が談論に接せざりしを遺憾といたし候。始め宮田君が余に言を傳ふるに電話の便を以てしたれば、突嗟の間に石橋君の何人なるやを確むる事能はず、宮田君また未見の人、大久保君の囑に出でたるのみ。石橋君を知らず、握手暫時、纔かに數語の會話によりて君が熱心なる社會主義者にして小生の知己なりし事だけを確むるを得申し候。

醫師の注意もあり、石橋君の病勢甚だ急なるを見て、長座の反つて君

が爲に好からざるを思ひ、辭意を告げ申し候。此日深く小生の心をいたましめたるは石橋君が徹頭徹尾、其恢復の希望ある事を言ひ、余に面して今日は病苦も去りて非常に快しと言はれたる事なりき。されど君が軀のあまりに甚しく憔悴したるを見たる小生は、此希望の語を聽きて何となく胸噪ぎ致し候。

灯の消えんとするや、其光一度あかしかや聞き及び候。まことに人の命の絶えなんとするや、一度小康に復るを常といたし候へば、其時小生は心私かに君が終焉の期の近けるにはあらずやなど、深く心を痛め候ひき。已に辭し歸らんとするや、石橋君は余が蝙蝠傘を持ち合せざるを見て、大久保君を招き余に其洋傘を借し與へられ候。辭せんとしたれど病君の強てといふに、反つて其鋭敏なる感情を激せしめんことを恐れ、好意を諒して石橋君の洋傘を拜借いたし候。

大久保君、裏木戸の處に私語して「どうせ其傘も當分の中は入りますまいから……」と余と顧て憮然たりぬ。

汗にまみれて神樂坂を下る時、余は再び思ひ返して石橋君の洋傘を見たり、其時小生は未だそを固く握りたるまゝ、驟さゝりき、フト石橋君の余に之を強たるは、或る不可思議なる宿命論者のいへる如く、永遠の形見となるべき品にては無かなど、思ひ煩ひしが、小生はわれから此不祥の空想を叱して、石橋君の恢復を深くわが心にいのり申し候。

此日、此時、小生の弟は加藤病院にて痲酔劑の爲に病苦を忘れて手術臺に横臥し痔瘻の治療中に候ひき。晩涼、汗を絞りて緑蔭深き自黒の寓に到着するや、忽ち病院より飛報あり。小生は驚きてまた取るものも取り敢えず、停車場に引き返して京橋に向ひ申し候。

翌八月一日 小生は豫ての約により月給取として銀座に通勤すること

御成り申し候。石橋君の病氣、弟の經過、實際生活の痛苦、一年志願のことなど一時に身邊に喟集して小生はユーゴー先生の結構の決して一片のローマンスにあらず。往々にして人生の事實なる事をしみぐと感じ申し候。

越えて四日細井肇君より石橋君の計報あり、更に『社會新聞』紙上に於て細井君の哀傷の辭を精讀し、始めて石橋君の人となりを知り、今更ならず氏に對する愛惜追慕の念禁じ難きを覺え申し候。それに付けても感慨殊に深きは吾黨の運動の犠牲多きことに候。思ふに石橋君以外にも未だ名を知られざる吾人の同志にて、其革命的思想を有するが爲に、嚴峻苛酷なる世の迫害に惱まされ、果ては身心ともに消毫され行く隠れたる犠牲も少からざる事と存じ候。

噫、石橋君は死の一瞬間までも自己の主義を忘るゝ事能はざりき、此の

如くにして日本に社會主義あり。此の如くにして始めて社會主義に侮り難き生命ありと申す可く候、石橋君が形見の洋傘は依然として小生の手に在り、永遠に保存して生涯の鑑戒と致す可く候。

今日は天長の佳節、寒霧凝つて雨となり青山のほどり軍人好き否、士官好きらしき年少婦人が、紅紫滴瀝として行き惱みたる態、雨中の紅葉も惚ばれて、有情とながめやり申し候。

歸來ひとり燭を剪つて、石橋君の事ども追想し、日記をくり返して此稿を認め申し候。

(十一月三日夜)

パイオニアの悪戦

自然主義を標榜して起つた諸君は、過去一年に亘つて可なりに好い戦を戦つたやうだ。諸君は此戦によつて必ず何等かの新しい經驗と、更にそれによつて新しい或る力とを得た事と信ずる。

諸君が一つの主義、理想を標榜した、鮮明な旗幟を樹て、進む時に、論敵の多数が諸君の主義、主張の幾分をも了解して居ないで、殆ど標的を逸した征矢を放つて、自ら得たりとするものであるといふ事をしみるゝと感得た事と信ずる。單に社會の智的水準を代表する大多數の論客が、諸君に對して當ての無い毒矢を放つばかりではない、一世の學者、大家と稱せられたる者が斯る多くの場合に於て、此衆愚王の後援者であるといふ事も諸君は此戦によつて尤も好く經驗し得たに違ひない。され

ば單に文藝上の問題のみに限らず、政治上、宗教上、社會上凡ての場合に於て一つの新しい主義理想のバイオニアは、常に斯る社會多數の非理なる壓迫に苦しめられるのである。主義、理想其ものにどれ程の價値があるかは別問題として、此孤獨の先導者に石を投げ、市場の塵を浴せかける、舊社會の代表者は何時でも、先導者のいふ事だけでも正解して居て呉れないのが常である。

故に吾人は其人の主義、主張の内容を理智の度量衡にかけて見る事はかりを努めて、其人の生涯其者の價値を忘れてはならぬ、糞尿を掃除するに誰か、悪臭を忍んで人の嫌がる事を敢てしなければならぬ。講堂に立つて清潔の演説をする役になるのは、爾んなに困難な事ぢやあ無い。爾んないに偉い事ぢやあ無い。

イブセンの生涯にも、ゾラの生涯にも、ツルゲーネフの生涯にも、ピ

ストルの硝煙と、匕首の閃光とがつき纏ふた。今は知らず、昔、日本の文學者は、恁んな事實をひごく嫌がつて、眉を擡めて吾輩文學者の使命は爾んな卑近な『今日の問題』に力を致すのではないといふて排斥した時代もあつた。けれども好く考へて見ると、清潔の講演は易く、汚穢屋は難しで、誰しも傍ら學校の先生でもして、傍ら文壇の大家と崇められ、社會に固定された習慣、道徳に調和して行つた方が、どんなに安樂であるか知れたものではない。けれども一度自分の主義主張を明かにして、社會に對する個人としての自己の位置を深く意識して來た場合には、其處に初めて自分の生涯に對する強い興味と力とが湧いて來る。

自然主義の諸君の近頃の態度は明かにそうだ。娛樂文學や、戯作文學に對して自然主義の旗幟が文壇の一方に掲げられて以來、社會からは随分酷い誤解を受けて非理な攻撃の標的にされた上に、頑迷固陋な官憲の迫

害までも受ける事となつた。恚う誤解されたり、迫害されたりするに随つて、諸君の舊社會に對する地位の自覺が彌よ強められて來る。生涯に對する新しい興味と、底ひしられぬ力とが油然として湧いて來る。

生田葵山君が有司の前にひかれ、地上の權威に對して爲したる態度、答解は、吾人の眼から見ると氣の毒な程臆病なのであつた。吾人のコムラツドにして、其『父母を蹴れ』といふ論文の爲に廿四歳の若冠を以て法廷に起ち、尤も大膽にして、尤も直截なる答解をなしたる青年がある。自然主義の大家諸君にして、若し眞に其生涯を愛するならば、其作物に對して少くとも此青年だけの誠實と、力とがあつて好いと思ふ。吾人のコムラツドは諸君の眼から見て、或はあまりに小さい理智の爲に囚へられて居る者であるかも知れない。けれども彼等は生涯を愛する、彼等の生涯は諸君の所謂自然主義の生命である。眞に力ある作物は、作者の生命

其ものでなければならぬと云ふ事は、吾人の久しく唱へた所である。ゾラの四福音書、ツルゲネーフの四大社會小説、トルスイットの『復活』ゴルキ一の『母』之等の晩作が各家從來の諸作に比して純藝術的の價値を失つたものである、何等かの理智に束縛されたものであるといふ事は、吾人が屢々諸君の口から聞く所である。けれども諸君がもし眞に現在の安樂を捨て、文壇的地位以外、眞に自己の生涯に強い興味を持つに至つたならば、此點に到着するのが或は自然の徑程ではなからうか。兎角の議論は別として、一寸した官憲の迫害に臆病な態度をとつて見たり、露探が殺されたといふて愚民の感情に投するやうな語氣を漏して見る小説家の口から、劍とピストルと斷頭臺との間に、バイオニアアとして尤も勇敢な惡戦を續けて來た人の、肺肝の血とも見るべき晩年の大作が、文壇的價値、純藝術的價値といふやうな標準の下に一概に排斥される

のを見ると多少片腹痛い氣にもなる。諸君の生涯が諸君の文壇的地位と調和しない間は、換言すれば諸君が依然安逸を欲する以上、自然主義も單に文壇一時の流行たるに止まるであらう。諸君がもう少し地上の權威と戦ひ、もう少し多數社會と戦ふて、眞に『我は世界に於てたゞ孤獨なり』と叫ぶに至つた時、諸君はもう少し同情ある人となる事が出来るであらうと思ふ。

古來日本の藝術家は、藝術的の嫉妬心を以て孤獨であつた。藝壇的地位に對する嫉妬心は實に娛樂主義、戯作主義の文藝が産んだ私生兒である。諸君の作物をして諸君の生涯たらしめよ、諸君は再び此私生兒を抱くの要はないのだ。諸君は『われ孤獨なり』といふが好し、大に好し、されど吾人は諸君が文壇の友の間に於て只孤獨なる事を望まない。

諸君をして世界に於て只孤獨たらしめよ、社會に於て只孤獨たらしめ

よ、

敬愛する自然派の諸君よ、吾人は諸君が勇敢なる生涯の建設者にして、大膽なる社會のバイオニアータらん事を望む。

サンマは目黒

サンマだの、イワシだの云ふ魚は、可味くもあり、廉くもあり、簡易生活には持つて来いの代物である。今は丁度サンマの季節で、我が住める目黒あたりの貧乏町は、夕方になるさ、方々でサンマを焼く薫りが甚だ高い。それについて思ひ出さるゝのは、「サンマは目黒」と云ふ昔話である。

昔し、將軍だか、大名だか知らぬが、いづれ米の價の知らぬ、煩瑣生活の人であつたらう、ある日多くの家來を連れて、目黒の里に鷹狩りを試みた時、幾ら將軍でも、大名でも、飯時分には腹が空く、それも御殿と云ふものゝ中に居る時とは違つて、人家を離れた自然の領域に來ては、持前の我儘も云へず、方々を探し廻はつて、漸く一軒の汚い茶店を見つけ出し、其の茶店で繞かに飢を醫したが、其の時茶店の婆が焼いて出したおカズは、例のサンマで、將軍だか大名だかは、生れてこのかた、こんな可味いものは始めて喰つた云つて、大層サンマが氣に入つた。

それで御殿に歸へつてから、早速料理番に仰せが下つて、サンマを出せと云ふことになつた。料理番は大いに驚いて、サンマのやうな賤しい魚は貴人の召し上るもので無いと思つたが、上意とあれば仕方が無いので、早速市中の魚屋からサンマを取り寄せたが、直ぐそれを焼いて出すと云ふやうな、簡單で風味の好いことは煩瑣生活の禁物であるから、先づ其のサンマを茹で、皮を剥いて、骨を抜いて、肉をボロ／＼に碎いて、錦手の皿に盛つて差し上げたので、待ち兼ねた將軍先生、一箸喰べて見て、「どうもこのサンマは可味く無い、サンマは目黒に限る」と云つた。

これが「サンマは目黒」と云ふ昔話の大意である。煩瑣生活が、自然を告し、人情を損ひ、事物を無趣味にするこの、好い教訓では無いか。(小剣) 雑誌「簡易生活」より

ク ロ ポ ト キ ンの 哲 学

左の一篇はヒーター、クロポトキン翁が倫敦に於て爲したる講演を譯述し替へて雑誌「社會主義研究」に掲載したるもの、就て翁の哲學の大意を知る事を得べし。

余は今茲に無政府主義の哲學を語らんとするに際して、多少の躊躇なきを得ないのである、何となれば方今無政府主義はまだ單に一片の空想に過ぎないもので、恐るべき現文明の破壊であると思惟するものが多い。現に巴里の新聞紙ですら、無政府主義の哲學は『破壊』の外に出ないもので、其論據は單に『兇暴』に過ぎずと絶叫したのは、僅かに二三年前の事ではないか、此時に於て限ある紙面で之が説明を試みんとするも或は讀者をして益々其疑惑を深からしむるに終るやうな事はあるまい

かと思ふからである。

けれども無政府主義の内容と雖も、一方に於ては、漸く世人の了解する所となつて、公衆の之に對する態度も忠實となつて來て、近頃では少くとも其立脚地を得て、一部の識者からは確乎たる理想を存する主義として認めらるゝに至つたので、中には其主義のあまりに美的にして、其理想のあまりに高遠なるに驚いて、神ならぬ人類社會の將來に於て此の如き理想が果して實現され得るかを疑ふものすらあるに至つた。けれども世間の大多數は未だ無政府主義の科學的論據を知らない、此時に當つて無政府主義の哲學を語らんとするのは、果して早計ではあるまいか。彼社會主義すらも未だ誤解され易き今日に於て、果して無政府主義に確乎たる哲學が有るといふ事を公言し得るであらうか、之茲に余が極力其辯解に當らんとする所以である。

余は今自然科學の智識を促へて來て此説明を容易ならしめんとする、けれども余は此自然科學の智識から直接に社會的理想を續釋しようとするものではない、只初から人類社會の具體的の事象によつて無政府主義の理想を語るよりも、確乎たる科學で以て説明されたる現象を借りて來て、説明の方便とする事が甚だ利益であると思ふからである。

諸君試に古來なされたる宇宙の解釋に就て見よ、古代の物理學者は地球を以て大宇宙の中心なりとして、日月を初め無數の星辰は皆我地球を軸として廻轉するものである、人類は實に宇宙の中心たる地球を代表して其表面に生存して居る萬有の靈長で、天變地異皆一として神が人間に對して備へたる用意であつて、かの雷鳴の如きは實に人間の行爲に對する審判であると思惟して居たのである。

けれども十六世紀に至つて、もう開化せる人民の間に於ける宇宙の解釋は全く一變したのである、曾て宇宙の中心と見做されたる地球は、大なる太陽系中一塊の土にも等しき小遊星であつて、我地球に比して無量の大きさを有する太陽すらも、蒼空に燦として輝いて居る恒星の一に過ないので、銀河の中さへ猶幾多の太陽が含まれて居る事が知らるゝに至つたのである、此宇宙の無限大に比して、人間の小さな事はどうであるか、曾て全宇宙は人間を中心として作られたりと稱して傲然たりし思想は寧ろ憐むべきものではないか。此宇宙觀の變化は、思想界に急潮の動搖を來した、無政府主義はまさに此新時代に萌芽を發したのである。

けれども變化は之のみではなかつた、諸君がもし十八世紀、もしくは十九世紀の初期になされたる天體學の書をとつて之を見るならば、其中にはもう宇宙の中心を地球なりと稱する謬見は見出さ出れぬ、けれども

まだ、太陽が其遊星の軌道、引力、秩序を支配し、整然として誤らざらしむるものであると説いて居る、それで若し一旦其組織に破滅の時節が來る時には、中心の恒星は再び其秩序を恢復し得るものと思惟して居たのである。

けれども此説もまた最近の科學によつて破られて仕舞つた、宇宙の無数の遊星の間に於ける秩序、組織は絶對であり無限であつて、渾然として大調和をなして居るのである。換言すれば宇宙を支配して其組織や秩序を整へて行く中心といふものはないのである、無量無数の星辰が、宇宙に雜然として散布されたる其間に自然の大調和が存在するのである。此の如くにして宇宙の中心説は地球から、太陽に遷り、太陽から更に一步を進めて無中心説に到達したのである。

此天體學の上に現はれたる變化は、單に此學說にばかりに留らない、現今に於てはあらゆる科學が盡く此模型に従て變化しつゝあるのである。曾て物理學者が、電氣や磁氣の本質が其物體以外にありとしたのは全く今日に於て行はれて居ない説である、今日物理學者が、電氣や磁氣の起る現象を解釋するのに或る一個の物體に、外界から一種の知られざる力が加つて此現象を呈するといふ様な解釋をする者はない、電氣や磁氣は、或る物體及其周圍の物質を構成して居る極小分子が不斷に各方面に非常に活潑なる運動をなして居る、此分子の運動より生ずる衝突がやがて電氣、磁氣、光、熱の起る原因となるのである。

更に生物學に於ても曾て種族の漸化、進化といふ様な研究が行はれたけれども、今日では單に個々の研究が之に代つて行はれて居る、植物學者でも、動物學者でも必ず個々物々の境遇、生活に就て、乾濕、冷熱の差異

より起る變化、營養物の多少より起る變化といふ様に精細な研究からして。綜合して種族の進化といふ結果に及ぼすのである。

更に生理學者の説明に就て聽け、今日の生理學者が或動物もしくは植物の生活に就て語る時に、彼等は、一人の人間、一本の樹木、といふ様に完全なる一個體として之を見ないで、無量無數の極小分子の集合體として見るのである、身體の各部分、消化作用も、感能作用も、神經作用も、皆内部に於て密接なる關係を以て聯結されて居る、然り而して各機關は皆個々の細胞の集合であつて、其細胞は又個々に生きて活動して他の細胞と不斷に衝突して自己の存在を完ふせんとして居る、此の如く細胞は個々に生存し、自己の自由に活動して而かも全體に於て完全なる個人を造り出して居る、豈驚くべき大調和ではないか、個人は則ち各機關の調和より成る宇宙である、各機關は則ち各細胞の調和より成れる宇宙

である、各細胞は即ち極小原子の調和より成れる宇宙である。此の如きが近世科學の進化である。

四

更に此變化はかの心理學の上にも重要な影響を及ぼしたのである、近世まで心理學者は一般に一個人としての人間を對象として研究した、されば彼等は時に古い宗教的口碑に信をおいて、漠然と人間を、善惡、邪正、鈍敏、慧愚といふ様に分類して見た事があつた、十八世紀の唯物論者の中にさへ、まだ人間の中心に靈魂のやうなものを認めやうとしたり、實體を認めようとしたものが有つたのである。

けれども今日の心理學者は斯くの如き説に執着しない、彼等は、人間の身體の中に無數に分離して獨立して居る自治的の、個々の能力を認める、此多くの能力が調和し、合成して、完全なる人間となる、則ち人間は個

々獨立して生存せる幾多の能力、腦細胞、血液細胞といふ様なもの、渾然たる合成である、之等の各部分は相互に密接なる關係を保つて行くと共に、又相互に相衝突し、相排斥して絶えず活動して居る、其間に平衡があり均勢があり調和がある、けれどもそれは決して何か中心の、例へば靈といふやうなものに支配されて此調和が生ずるのではないのである。

五

讀者は此二三の科學上の實例によつて、自然科學の趨勢を知る事が出來たであらうと思ふ。此傾向を約言すれば、即ち、昔時の科學は、事象の結果、もしくは總合されたる個體を捉へて來て之を直接に研究しようとした。今日の科學は之と全く其研究の方法を異にして、其個體を組織して居る極小分子からして研究の歩を進めやうとして來たのである。

今日の科學者は自然界の大調和といふ事を認める點に於て決して昔時の學者に劣るものでない、實に自然界は巧妙なる大調和である、けれども今日の科學者が、昔時の科學者と異なる點は此自然界の大調和に對して、『自然の法則』といふ様な外界の力によつて、説明を試みない點に在つて存するのである。從來『自然の法則』と稱して來たのは何であるかといふに、或る現象と現象との間に横つた一種の關係を指したもので、其關係が明瞭に解釋されなかつたので、一種の神秘的な説明がしてあつたのである、それで各法則といふのは、若しも此の如き條件の下に於て此の如き現象が生じたならば、必然的に他の此の如き現象が続いて起るであらうといふ、原因結果の關係といふ事が出来る。法則といふものがあるならば、それは神によつて現象の外に置かれた、不思議の力でなくして、現象そのもの、間に含まれて居るものである、各現象は必然的に生起す

べきものを支配して居るので、法則といふものが決して現象を離れて存在するのではないのである。

自然界の調和といふ事は直接に因果の關係を以て説明する事が出来ない、そこで現象以外に神の法則といふやうなものを夢想する、けれども或る現象が如何にも絶妙に調和されて、平衡、均勢を保持して行くといふのは、此事象が建設されんとする當時、此調和の繼續する期間と同じ間、或は排斥し、或は衝突して、而して後初めて建設されたものであるのだ。何となれば、一瞬間に忽然として滅したる現象は、其現象が生ずるのも同じく一瞬間になされたので、百萬年續いて居る調和の現象は、之が生ずる前に百萬年間の不調和の争闘があつた事を表現して居るのである。例へば吾人の太陽系中に在る一遊星が、整然たる秩序と組織とを保持して百萬年繼續したならば、太初太陽系が造られない前、渾沌たる衝突、

不調和の百萬年が存在したといふ事を知るのである。電光が一閃して滅したの、やがて電氣の一瞬間の衝突を意味して居るのではないか。

此の如くにして調和は全ての力が或る一點に働きつゝある間の現象に過ぎない。もし此方の一が其活動を妨害された時に茲に調和が破れるのである、或る力が其活動を阻害された時には其力は其儘滅して仕舞はない、必ず潜勢力となりて、從來調和されて來た組織を破壊して、更に新しき組織を造らんとして無秩序の時代に入るのである。諸君、アノ火山を見給へ、囚はれたる力は、やがて恐ろしい熔岩の雨を降らして、あらゆるものを破壊し亡滅せしめざれば竭まんではないか。諸君、人類の革命もまた此の如きものである。

六

更に歴史に就て見ると、曾て歴史は王朝の歴史、國家の歴史であつて、

國民個性の歴史でなかつた、今日に於て歴史家は單に歴史の表面に現はれたる現著なる事實もしくは二三の英雄豪傑に就て研究するのみでなく、其當時に於ける國民の數、其宗教、其生活の方法、其理想、及其理想を實現せんが爲に取りたる彼等の手段、之等に關する精細なる研究の結果を以て、歴史の事實を解釋するのである。

法律學者はどうか、彼等も今日では唯成文法律の解釋を試るばかりでなく、人類學者のやうに、其原始的の制度から研究を初めて、漸次に其慣習的の制度が進歩發達して來た跡を尋ねるのである、此の如くにして其社會の原始的の慣習、制度を研究する事は今日の法律學者にとつて最も重要な事柄の一つである。

經濟學はどうか、經濟學も初めは國民の富を對象としたが、今日ではまづ個人の經濟状態から研究の歩を進めて、而して社會の問題に

及ぶのである、或る國民が外國貿易を如何になすかといふ様な事は必ずしも經濟學の重要な問題ではない。彼等は或は金殿の門を訪ひ、茅屋の戸を叩いて、富貴貧賤の別なく個人の經濟狀態を究めて其貧困の度と奢侈の度とを知つて、而して後に社會、國家の問題に及ぶのである、讀者は之によつて此の如き科學の間にも、前と同じ様な研究の方法が行はるゝに至つた事實を認めなければならぬ。

七

此の如くにして吾人の社會といふ概念は非常に異て來た。無政府主義の理想は過去と現在の社會現象に新しい解釋を與へて、更に未來の社會生活の預言を提出した。無政府主義は實に新時代の新哲學に根據して居る。これ此主義の理想が多くの點に於て現代の大思想家、大詩人の理想と密接して居る所以である。

自己の權力を維持して、何處までも此の社會組織を繼續せしめんとする少數なる支配階級に屬する、僧侶、將軍、學者、官吏によつて深く教へられたる社會の概念が、今や漸く多數平民の頭腦から消滅せんとしてあるは事實である。此新概念の中には、もう權力中心といふ様なものゝ存在する餘地はない、彼等は未來の社會に於て共同の勞働に依て、共同の資本を蓄積して、此資本で社會共同の事業をするのである。彼等はもう少數の權力階級を中心として社會を組織するといふ様な愚を再び敢てしない、彼等の社會に於ては各人の個性、能力を圓滿に發達させて渾然たる調和をなさしむるのである、權力なく服従なく、支配なく制裁なくして立派に調和する社會生活をなし得るのである。

無政府主義の理想は決して新しい理想ではない。吾人が歴史を精細に觀察するならば、此種の普通の制度は幾度も、種族の上に、村落組織の

上に、中世社會に行はれたる或種の商社又は都市同盟の上にさへも實行された事があるのである、けれども此種の組織は皆權力者の爲に攪亂されて仕舞ふた、第九世紀頃の基督教の一派にも此種の理想を表白して居た者があつたけれども、近世まで權力階級に盲従したる神學は常に此原始的基督教の理想を束縛して居たのである。此の如くにして此無政府主義の理想が、經濟學、社會學によつて確乎たる理論の根據を與へらるゝに至つたのは、極めて近頃の事である。

現代に於てはもう經濟上の奴隸が存在する限り、空漠たる自由を語る事は全く無益であるといふ事が、深く深く多數人類の頭腦にしみ込んだ。『自由を語る勿れ、貧困は奴隸制度に非ずや』といふ絶叫に至る處の労働者の口より起つて、世界の文學は此悲慘の聲に著しい傾向を生じて來た。見よ東西兩半球に於ける幾萬の社會主義者は、一致共同して現在の

經濟組織の永續すべきものでない事を絶叫して居るではないか、今に於ては、資本家すら此科學の説明に對しては如何ともする事が出來ないので、之に對して只、『されど汝は、今日以上の組織をなし得るか』といふのみである、彼等は今今日の社會組織に與へられたる致命的の打撃をのがれて、積極的に此私有財産制度を樹立せしむる底の論議をなし得る者でないのである。此の如くにして、思想の自由と意志の自由の存する限り、此理想は竟に實現されざればやまないものである。

例へば巴里の都市に就て見るも、幾世紀の間、幾多の國民の労働、技術の結果によつて積み上げられたるものを、故なくして、或る少數の權力者が私有して、毎日膏血を絞つて、此都市の繁榮と壯麗と名譽との爲に計りつゝある多數の住民を自由に支配するといふ事が正常なる理想であらうか、此の如き横暴は尤も慧巧なる虚偽の教育手段によつて、一時

は民衆を瞞着して過す事が出来る。暗愚なる彼等は、現在自己の悲惨なる地位の由て来る事をすら知り得ないかも知れぬ、けれども一度大膽なる先覺者が蹶起して、其説明を彼等無教育者の前に試みた時に、彼等は必ずや痛憤して『噫彼等の富は不法なる掠奪の結果也』と絶叫するに至るであらう。幾多の農民、小作人が、貴族、地主によつて私有されつゝある土地が全く掠奪の結果なる事を自覺するに至つた時に、彼等は猶喜んで地主の利益の爲にいつまでも其奴隷たる事を肯ずるであらうか、今日工場に於ける労働者、鑛山に於ける坑夫が、今の資本家の所有が盡く掠奪の結果である事を知るに至つた時にも、彼等は猶喜んで、資本家奴隷として甘んずる事が出来るであらうか、此の如くにして新時代は来るのである。

八

現社會の惡組織が生じたる悲惨は、日一日と其甚しきを加へて來た。私有財産制度の下に於て生活若しくは生産に必要な土地、家屋、食物機械の全てが少數なる一部の資本家、地主の手に落ちて、依て以て萬民に生活の保證を與ふべき生活の大部分は貪慾なる資本家の私有に歸して仕舞うのである。労働者は實に今日の學術の力によつて容易に多數の人類の生活を満足せしむべき物件を産出し得るにも係らず、今日の社會組織が不公平にも之れを一部の權力階級にのみ分配して、萬人の苦痛を顧みない事を漠然と知つて來たのである。

此の如く生産機關が資本家の私有に歸した以上は如何にしても大多數の平民は彼等の奴隷とならなければならぬ。労働者の解雇の如きは資本家の自由である、資本家が社會萬人の生活を維持すべき生産機關を私有しながら、横暴にも勝手に自己の利益の爲には何時でも其工場を閉鎖

する。此時勞働者は其職を失ふて、市上に彷徨して其職を求めなければならぬのである、見よ、煉瓦職工は不景氣の爲に幾人どなく、饑餓に迫つて市上を浮浪して居る、それでは社會に建築の必要がないのか、否、都市の住民の五分の一は豚小屋の如き家に雨露をしのぎつゝある貧困者ではないか、靴職工は不景氣の爲に失業して道路に彷徨して居る、社會に此の需要はないのか、否、否、社會は大に此靴を要求しつゝあるのではないか、實に今日の經濟組織の矛盾は茲に至つて極まれりといふべきである。

九

此の『生産超過』といふ經濟状態を説明せんとする人が、其當時の社會に於て或種の物品が全人民の要求を満足せしむる必要以上の過量に産出されてあると云はうとしてもそれは全く駄目である、何となれば今日市

場に於て生産物の賣行が更に無いといふ事は、決して社會民衆が生活の上にも其物品を要しないといふのではない、米にしても、酒にしても、衣服にしても、一方には此物品を要求しながら而も之を得る能はざる貧民の苦痛に至る處に満ちて居るのに、一方市場に於ては、山の様に物品を積上げられて買手の無い爲に生産超過といふて居る、則ち經濟學者の所謂『生産超過』といふのは、資本家、権力者によつて壓迫されたる勞働者が生活に窮して日常生活の物品を買ふ力がなくなつたといふ事の外に出でない、實にブルードンがいふた如く、勞働階級のもものは、かの怠惰なる紳士間に不法の利益を與へんが爲に、非常の苦痛を忍んで工場に於て勞働する、其勞働によつて自己の階級が産出した物品を再び市場に於て仲買人の手から買ふて生活して居る、此日常生活の必需品を買ふのに賃金があまりに少い時、則ち不景氣と稱する恐慌が襲ふて來る、品物が市場に停滯

する、之が則ち生産超過と稱する現象であるのだ。

今日の經濟組織の要點は、直接に物品を製出する大多數の労働者が其物品に依つて生活する事が出来なくなつて反て、少數の資本家が其利益の大部分を横奪して仕舞うといふ點に存するのである、何處の國でも機械産業が益々盛に行はれる處に於ては、生活に窮する労働者の階級が彌々増加して行くのである、資本家の階級に依て生産機關が獨占されて居る處では何處でも、其産業が社會萬人の要求を目的として行はれないで、只一個人の一時の暴利を目的として營まれるのは到底避け得べからざる傾向である、此の如き社會に在つては、労働者の人格は全く無視されて恰かも物品の如く市場に賣買される、資本と共に之がなくては物品の一つも作られない、車輪の一つも動かない、貴い労働は、現代に於て此の如く卑視されて居るではないか、此の如きは實に現代の經濟組織の要點である

更に此の如き經濟上の争は、國際關係の間にも行はれて居る、英國や佛國が産業の卒先者として、學術の進歩に後れたる諸國民の間に立ち、毛皮、綿布、絹布、鐵、其他機械の類を盛に彼等後進國の間に輸出しつゝあつた間は、常に經濟的に彼等國民を支配すると、資本家と労働者との關係に於るが如きものであつた、けれども此の状態は決して永續しない、見よ今日では曾て三十年以前に於て、英國、佛國の後進國であつたものが、今や盛に綿、毛皮、絹布、機械、貴重品等の産出國となつて來た、此後進國の或者の如きは實に遠き外國の市場を舞臺として、かの先進國に對し生産物の競争を開始したるのみならず、今や先進國の内地にまでも追つて、激烈なる競争を挑んで居るものがある、最近數年間に於ける獨、瑞、伊、米、露、日の勢力は實に其一例である。之に次でメキシコ、印

度、セルヴィヤの如き實に今進歩の途にあるものである、若しそれ彼支那帝國にして、一旦覺醒して隣邦の日本に摸倣し、産業國として蹶起するに至るならば、其時世界の大勢は如何なる状態を呈するであらうか。

斯くの如き形勢の結果は、産業界に於ける恐慌の頻繁と永續を來し、又近年に至つては、東洋及びアフリカの市場に對する戦争は、殆んど日常の事となつた、歐洲諸國の間に於ては、最近廿五年間、戦争が停止せられて居るけれども、それは主として、勢力ある理財家が更に多く諸々の國家に負債をさせる事を以て自己の利益と爲すからである。若し他日、戦争を煽動する事が、『黄金』の利となる時が至れば、人間の一大群は他の人間の一大群に向つて驅り立てられ、世界の大理財家の事務を整頓せんが爲に、互ひに相屠殺するであらう。

今の世の萬事は悉く此の經濟組織の下に相連關して居る、悉く相連關

して遂に此の商業制度の没落に歸するのである、而してその没落の來るは只だ時間の問題である、而して其時間は既に眼前に迫つて居るのである。

一

大勢斯くの如し、然るに此の避く可からざる革命の爆發が、今日の如く遅々として進まないのは、果して如何なる原因であらうか、之には種々な理由がある、けれども其原因の最も重なるものは、今や社會主義の思想の上に一大變化が起らんとしつゝあるのだ。諸君は先に余が本論の最初に於て述べたる科學界に於ける學說の變化を記憶せらるゝであらう、則ち科學上の變化と同様な變化が社會主義的思想の上にも起つたのである。

社會主義は最初共產主義 (Communism) の形を以て現はれた、而して

社會の經濟關係さへ労働者の利益となる様に改造せられるならば、如何に強大なる政權の下にも甘んじて従ふといふのが、當時の思想であつた。然るに爾後佛英等の諸國民間に大革命が行はれた。政權的共產主義及び神權的共產主義は労働者の嫌惡する所となつた、此の嫌惡が更に新思想、新主義を生じた、即集産主義 (Collectivism) を生じた、集産主義(譯者云、即ち今の社會主義)は最初生産機關の共有を標榜し、各團體が受くる所の分配は、共產的にせよ、個人的にせよ、そは各員の擇ぶ所に任せると云ふ事であつた、而して此制度は漸次に共產主義と個人主義との混和物と變じた、今日の集産主義は、生産に關する物は總て共有財産と爲し、労働者は其生産に費した時間の數に準じて一種の労働切符を分與されると云ふ事になつて居る、そして労働者は此切符を持つて行つて自分の好む物品を買ふのである、其物品を賣る所は今日の小賣店と全く類を異に

した社會主義的の賣店で、其物價は各其の生産に要する労働時間に依つて定められるのである。此理想は極めて古いものでロバートオーエンよりブルードンに至り、遂にマルクスに至つて之を『科學的社會主義』と爲したのである。

けれども此主張は竟に多數民衆の心を得るに至らなかつた、民衆は此主義が幾多の缺點を有して居る事を豫知したらしく思はれる。單に時間の長短のみでは労働の社會的効益を計る事が出来ぬ。アダム・スミスからマルクスに至るまで、幾多の經濟學者は價值の標準を労働時間の短長にのみおいて來たので、また此價值の問題は完全に解釋されて居なかつた、凡そ物品が市場に於て取引される時には、其價值は、單に之を産出するに要した労働時間の數によるばかりでなく、その物品が社會の需要を満足せしめた度に大關係を生じて來るのである、價值は社會的事實で

あつて、交換の結果として生ずるのであるから、之に二重の性質が存する事になる、即ち労働の価値と需要を満たすの価値とを生ずる。

また一方に於て吾人が現今の悪經濟組織の解剖を試みるならば、其骨髓は、労働者が衣食に迫られて其労働力を賣らなければならぬといふ點にある、此の如くにして彼等の得る賃金は僅かに其日暮しの料に過ぎない、労働の結果として産出されたる物品の利益は悉く資本家に吸収されて、彼は一切の自由を全く束縛されながら黙然として其奴隷の境遇に甘んじて居る。

故に、今日の如き資本の集中を來したのは、剩餘價格を吸収したからでなくして、寧ろ此の労働力を賣らねばならぬといふ労働者の地位に依るのである。されば今日の資本制度を破壊せんとするならば、此労働力賣買の奴隷制度に對して痛撃を加ふるの外はない。

労働者は漠然として之を直覺して居る、吾人は屢々彼等が、如何なる社會革命も先づ衣食住を保證しなければ何にもならぬと嘆ずるのを耳にした、然り、彼等が賃金を拂はれて居る間は、彼等は奴隷である、彼等は其労働を買ふ者(個人にせよ、國家にせよ)に對する屈從者である、彼等の一般の考では、もしも今日の國家が資本家に代つて労働者を使役する事になつたならば、それこそ一層慘酷なる監督者が生ずるだらうとしか思はれない、無智なる多數の労働者は單に社會とか國家とかいふものを抽象的に考へる事は出来ない、國家といへばもう恐ろしい今日の官吏を想像するのである。

此故に集産主義は民衆の心を得ず、民衆は常に共産主義に歸らんとするのである。而して其共産主義は壓制的、権力的の者ではなくして、自由共産主義即ち無政府主義に歸するのである。

之を近世に於ける社會主義者の運動に就て見るも、吾人は歐洲に於て彼等の主張が一步でも無政府主義の理想に近接して來ない上は、公有といふ事に對する前述の疑惑が大眾を遲疑せしめて、折角熱心なる彼等の傳道も竟に其無効にして終る様な事はあるまいかと思ふのである。余を以て見れば、近頃社會主義が漸く周圍の事情に迫られて其歩調を更め、國家的組織の下に其理想を建設せんとせず、寧ろ國家を離れて、更に其組織と調和することなくして其理想を建設せんとするの止むを得ざるに至つた事を認むるのである。

苟も今日社會改革をいふものにして、貴族富象の獨占に歸したる生産機關を再び公衆の手に回復する事の合理的なるを認めない者はないのである。若しも各人が其少年の時代から、何處から如何にして彼等の食物を生じて來るか、彼等の家屋は建設されるか、彼等の書籍は造り出さるゝ

かを、充分に知るに至るならばどうであらうか、勞働者に對し、勞役の餘暇、此の如き教育が授けられるならば、社會の革新は期して待つべきである、此の如くにして共產主義が實行され得べきものである事は最早疑ふべからざる事である、只茲に残された一つの疑問がある、夫は此共產社會が組織される場合に、猶中心に權力者があつて公衆を其支配の下に服従せしめるであらうか、それとも自由共產主義則ち其中心に何等の權力もなくして絶對的自由の社會生活がなされるものであらうか、社會主義の一派は依然として今日の國家的組織を認めて此支配力を中心として共產社會を組織せんとして居る、又之に反對して、吾人の屬する他の一派は、全く權力を中心として組織する國家を否認する、人間は權力なく服従なく、命令なく制裁なく、絶對的に自由聯合の社會生活をなし得るものであるといふのが、即ち吾人の主張であるのだ。

若しも社會主義者が過去に於ける自己の思想の發展の迹を顧みるならば、彼等が初めて資本制度の廢止、即ち土地資本の私有の廢止が、歴史上の必然であるといふ新思想を聞かされた時、其心中に於て先入の偏見と戦つた事を記憶するであらう、之と同様に、今日初めて無政府主義者から、國家及法律の廢止、即ち行政組織、中央集權等、一切の統治制を廢止する事が、歴史上の必然である、國家を廢せずして資本制度を廢するは事實に於て不可能である、と聞かされた人は、必ず先づ反對の感情を起すであらう、此の感情は即ち國家と教會とが自己の利益の爲に我々に與へたる教育の結果である。

吾人は今茲に詳細に國家の組織を批評する暇がない、只少しく其の歴史的事實を解剖して見たいと思ふ。

人類は實に久しい間社會生活をして來たけれども、國家組織は實に人間社會生活の種々なる形式の一である、歐洲の人民が此國家を組織したのは、極めて近世の事であるといはなければならぬ、人類は切めて國家が組織される以前に既に數千年の社會生活をして居たのである、見よ希臘、羅馬は、マセドニア帝國、羅馬帝國が建設された、數百年も以前から立派な社會として存在したのである。今日歐洲に存在する中央集權の諸國家の如きも、十六世紀に至つて初めて建設されたものであつて、それ以前は中世の自治社會として、國家組織によらなかつたのである、近世の國家に於て用ゐられて居るが如き全ての機關を完備して、全ての階級の人間が眞の自由聯合を以て組織したる、中世の自治的社會は九世紀の昔から十五世紀の終まで繼續したのであつたけれども、當時に於て漸く發生して來た帝王の權力と教會の權力が聯合して茲に近世の國家が

生れて、從來の自治社會が跡を絶つに至つたのは、十六世紀の初期であつた。中世紀に於ける自由都市の組織に就ては佛蘭西のシヌモンデ及アウギユスチン、チエリーの著書に詳言されて居るけれども不幸にして未だ廣く讀まるゝに至らないのである。

彼等、地主、僧侶、法官、軍人、及び帝王は如何にして自治的社會を破壊して國家てふ新組織をなすに至りしか、彼等は公衆から自由結社の權利を奪うたのである、村落同盟、都市同盟、商業結社の類に對し武力を以て解散を命じた上に、其の共有の土地を沒收し其の共有の富を掠奪したのである、強迫的命令によつて、絶對的に自由結社を禁壓し、虐殺と、絞首と、禁獄と、焚火と、劍とを以て教會と國家とは遂に自治的社會を絶滅し得たのである。

吾人が現在の國家組織の下に於て、曾て中世に於ける工人、農夫が有したる自由結社の權利を再び獲得せんが爲に、政府と抗爭して漸く其權利の一步を占むるに至つたのは、僅かに三四十年ばかり前の事である、而も今や歐洲各國を通じて、數千の自由結社は組織されて居る、彼等はかくして學術、教育、産業、商業、美術、文學等、あらゆる方面の活動を企圖して居るのである、此種の結社は何處の國に於ても何處の地方に於ても必ず存在して居る、また勃興せんとしつゝある、之等の結社は内國に於ける各團體と共通し聯合せんと努むるのみならず、今や其國境を越えて盛に萬國聯合の急潮を示して來た、かくして集會結社の自由が許可されて以來、未だ五十年經過せざるに、既に其會員百萬を有するものが少からぬのである。

此の種の結社は至る處に於て國家の組織を侵して自ら之を建設せんと

しつゝある、見よ英國に於ては既に盜賊に對する防禦同盟もあれば沿岸防禦同盟もある、土地保護同盟の如きもある、此の如き組織は實に國家が借りて以て權力と威力の中心とする機關を人民が奪ふたものといふべきである、彼等は今や幾多の迫害と幾多の困難とに抗して此結社を擴張せんと熱心に努力しつゝある。

横暴なる專政權と強制力とを維持せんとする現代の國家が、力を極めて此國內を發達しつゝある各種の自由結社を迫害したるにも係らず、自治的結社は今や日一日と擴張されつゝある、吾人は現代に於て此著しき傾向と潛勢力とを認めざるを得ない、此に於て試みに問へ、今もし假りに勞働者が五年、十年、二十年の後（其年數は如何にもあれ）遂に今日の政府即ち地主、銀行家、僧侶、法官、軍人によつて建設されたる此相互保險の社會を破壊し、人民自ら其作り出だせる富を握り、自ら其將來の運命

を作らんとする時、彼等は再び此萬人の血を吸ふ『國家』てふものを建設するであらうか、或は寧ろ自由連合の共產社會を組織して無政府主義の理想を實現せぬであらうか、彼等は地方分權、自治組合等の如き現代の傾向に従はぬであらうか、或は此傾向に反して中央權力を再興するであらうか。

一四

フリーエーが常に嘲笑した『開化の民』即ち教育ある人民は、吾人が他日裁判官と警察官と獄吏とを要せざる社會生活をなし得るといふ理想を聞いて懼然として戰慄する、されど諸君は何時までもかの古文、古書にのみ詳しく更に社會の現状、民衆の生活状態に關して無智識なる、學者の手になれる死灰の如き書籍の言に耳を傾けなければならぬのか。

今吾人が巡査と探偵とに滿てる殺風景なる巴里の市街を安全に歩行し

得るが如く、寂莫として行人全く絶え果てたる田園の間を殊に平安に逍遙し得るものは、抑々警察官の賜であらうか、將た又、窃盜者、兇暴者を取締る官吏の不在の賜であらうか、或者は警官が無かつたならば兇暴者の現はれた時に如何にするといふであらう、けれども警察官が街燈の數よりも多く直立して居る、都市の中央に於てすら、強盜、窃盜、殺人の兇暴は益々多く行はれるではないか、今日吾人が安全に都市生活をして行かれるのは、裁判官、獄吏、警察官が、社會の安寧、秩序を攪亂する兇行者を制裁する爲であらうか、吾人を以て之を見れば、裁判官は實に殘忍なる一種の法律狂である、探偵、警犬の多數は、裁判所を中心として、糊口をしのぎつゝあるではないか、彼等は廣く良民の間に漂浪して何事をか嗅ぎ出そうとして居る、此の如きは反て社會の秩序を破壊せんとするものではあるまいか、吾人は堂々たる裁判所の裏面を洞察して此

怪物に深刻なる批評を加へなければならぬ、監獄は罪人の意志を殺し良心を消滅せしめた上、更に恐るべき悪囚と一室に起臥せしめて、其兇獍なる悪性に感染せしむるものである。此意味に於て現今の監獄なるものは、實に犯罪の大學ではないか、裁判所は兇暴の小學校ではないか。吾人が國家を否認して無政府主義の理想を説くのを聞いた人が、屢々吾人を以て人間以上の完全なる動物によつて組織さるべき社會を夢想するものと爲す、されど吾人は斷々乎として其然らざるを信ずる、吾人は只だ今日の組織に依つて人間を更に劣悪にしてはならぬと云ふのである。有名なる獨逸の法律者イーエリングは曾て現社會の社會的生活を保安する原力を説明せんが爲め『法律の目的』といふ一書を著した、彼は其草案の目次に於て先づ此社會を維持する二個の強迫的原力を擧げた、其一是賃金制度、他の一は法律によりて承認せられたる諸種の強迫、即ち之